

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

平成2年度

1 9 9 1 , 8

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団高松建設局

例　　言

1. 本書は、四国横断自動車道（高松～善通寺）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報で、平成2年度事業概要を収録した。
2. 本調査は、香川県教育委員会が日本道路公团高松建設局から受託し、委員会の指導のもとに財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 調査組織（平成2年度）

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括所長	十川 泉		
次長	安藤 道雄		
総務係長	加藤 正司		
主査	山地 修		
主事	三宅 浩司	(～平成2年6月1日)	
主事	斎藤 政好	(平成2年6月1日～)	
調査参考事見勢謹			
係長	渡部 明夫	技師	大久保徹也
係長	藤好 史郎	技師	森下 友子
係長	真鍋 昌宏	技師	市村 拓二
文化財専門員	広瀬 直樹	技師	古野 徳久
文化財専門員	金丸 真明	技師	和田 素子
文化財専門員	牧野 啓造	技師	木下 晴一
主任技師	鍋井 一視	技師	山下 平重
主任技師	植松 邦浩	技師	森下 英治
主任技師	西村 尋文	技師	歳本 晋司
主任技師	岡 敦憲	技師	佐藤 電馬
主任技師	真鍋 嘉宏	調査技術員	高橋佳緒里
主任技師	大西 義則	調査技術員	萬木 一郎
主任技師	渡邊 茂智	調査技術員	篠原由紀子
主任技師	中野 升一	調査技術員	白川 悅代
主任技師	西岡 達哉	調査技術員	石川ゆかり
技師	藤川 善規	調査技術員	阿河由紀子

技 師 片桐 孝浩	調査技術員 松尾 優美
技 師 大林 修三	調査技術員 尾方ひとみ
技 師 大谷 伸一	調査技術員 塩田公一郎

4. 調査にあたって下記機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)

香川県土木部横断道対策室、同善通寺土木事務所横断道対策課、同坂出土木事務所横断道対策課、同高松土木事務所横断道対策課、善通寺市都市計画課、国分寺町建設課、四国横断自動車道建設善通寺市龍川地区対策協議会、同坂出市川津連合対策協議会、同坂出市中嶽地区対策協議会、同坂出市西又地区対策協議会、同国分寺地区対策協議会、同高松市中間地区対策協議会、各地元自治会

5. 本書の執筆は各遺跡調査担当職員が分担した。

6. 本書で使用した遺構略号は、下記の通りである。

S B (掘立柱建物跡)	S H (竪穴住居跡)	S D (溝状遺構)
S K (土坑)	S P (柱穴)	S R (自然河川)
S T (墓)	S X (不明遺構)	S E (井戸)
S A (積列)	S F (窯跡)	

7. 捜図の一部に国土地理院地形図(1/25,000、1/50,000)を使用した。

挿 図 目 次

第1図 調査遺跡位置図.....	4	第24図 E区第1遺構面出土遺物実測図.....	39
(龍川五条遺跡)		(川津中塚遺跡 I 区)	
第2図 遺跡周辺地形図.....	5	第25図 調査区割図.....	40
第3図 調査区割図.....	5	第26図 遺跡周辺地形図.....	26
第4図 IV区B、V区主要遺構及び トレンチ配置図.....	6	第27図 川津中塚遺跡 I 区 A地区遺構配置図.....	44
第5図 前池地区主要遺構配置図.....	7	第28図 下川津遺跡南部、川津中塚遺跡 I区北部遺構配置図.....	45~46
第6図 出土遺物実測図.....	9	第29図 川津中塚遺跡 I 区出土遺物.....	47
(龍川四条遺跡)		(川津中塚遺跡 II 区)	
第7図 遺跡周辺地形図.....	13	第30図 遺跡周辺地形図.....	49
第8図 遺構配置図.....	15~16	第31図 遺物実測図.....	52
第9図 遺物実測図 IV区-②.....	18	(川津下樋遺跡)	
第10図 遺物実測図 V区-①.....	19	第32図 遺跡周辺地形図.....	55
(川津東山田遺跡 I 区)		第33図 南半部遺構配置図 (弥生時代前期).....	57
第11図 遺跡周辺地形図.....	21	第34図 S R 01出土遺物実測図.....	58
第12図 地区割図.....	22	(川津二代取遺跡)	
第13図 主要遺構配置図.....	23~24	第35図 遺跡周辺地形図.....	59
第14図 遺物実測図.....	25	第36図 遺構配置図(中世以降).....	60
第15図 遺物実測図.....	26	第37図 遺構配置図(古墳時代以前).....	61~62
(川津東山田遺跡 II 区)		第38図 土層断面図.....	61~62
第16図 遺跡周辺地形図.....	29	第39図 出土遺物実測図.....	63
第17図 調査区割図(1/1,500).....	30	(川津一ノ又遺跡 I・II 区)	
第18図 出土遺物実測図.....	30	第40図 遺跡周辺地形図.....	67
第19図 遺構配置図(1/500).....	31~32	第41図 トレンチ配置図(1/1,500).....	68
(川津川西遺跡)		第42図 第3トレンチ・第11トレンチ 土層断面図(縦1/40、横1/400).....	68
第20図 遺跡周辺地形図.....	35	第43図 川津一ノ又遺跡 II 区 トレンチ配置図.....	71
第21図 W区第2・第3遺構面 遺構配置概略図.....	36	第44図 第1・第4トレンチ土層断面図.....	71
第22図 E区第1遺構面遺構配置概略図.....	37		
第23図 W区第2遺構面 S D01出土遺物実測図.....	38		

本文目次

I 平成2年度発掘調査事業概要	1
II 各遺跡の調査	5
1. 龍川五条遺跡	5
2. 龍川四条遺跡	13
3. 川津東山田遺跡I区	21
4. 川津東山田遺跡II区	29
5. 川津川西遺跡	35
6. 川津中塚遺跡I区	43
7. 川津中塚遺跡II区	49
8. 川津下樋遺跡	55
9. 川津二代取遺跡	59
10. 川津一ノ又遺跡I・II区	67
11. 川津一ノ又遺跡III区	73
12. 川津一ノ又遺跡IV区	81
13. 府中地区予備調査	89
14. 国分寺楠井遺跡	93
15. 中間西井坪遺跡	105

(川津一ノ又遺跡III区)	
第45図 遺跡周辺地形図	73
第46図 調査区全体図 S = 1/2,000	73
第47図 集落域西半遺構配置図 S = 1/200	75
(川津一ノ又遺跡IV区)	
第48図 遺跡周辺地形図	81
第49図 川津一ノ又遺跡IV区 出土遺物実測図	83
第50図 川津一ノ又遺跡 IV区遺構平面図	87~88
(府中地区予備調査)	
第51図 府中地区予備調査地点 (1/25,000)	90
第52図 府中横山地区(その2) トレンチ配置図	91
第53図 府中横山地区(その2) 1 Tr.検出土坑実測図	91
第54図 府中小原地区(その2) 検出ピット(上)と表採遺物(下)	92
(国分寺楠井遺跡)	
第55図 遺跡周辺地形図	96
第56図 遺構配置略図	97
第57図 S F01窯体	98
第58図 S F02窯体	99
第59図 楠井遺跡出土土器(1)	102
第60図 楠井遺跡出土土器(2)	103
第61図 譲岐国府跡出土土器	104
(中間西井坪遺跡)	
第62図 遺跡周辺地形図	105
第63図 3 a 区 塙輪焼成土坑	106
第64図 中間西井坪遺跡 1990年度 調査区遺構配置図	107~108

表 目 次

第1表 調査遺跡一覧	3	(川津中塚遺跡 I 区)
(龍川五条遺跡)		第5表 古墳時代後期
第2表 出土遺物観察表	8	建物・排列一覧表 45~46
(川津東山田遺跡 I 区)		(中間西井坪遺跡)
第3表 竪穴住居一覧表	22	第6表 出土印石器仮集計表 105
(川津川西遺跡)		第7表 古墳要素表 109
第4表 出土遺物観察表	40	

写 真 目 次

(龍川五条遺跡)

- 写真1 V区④ S R-02流路C
(北より) 10
- 写真2 IV区B 流路群(南より) 10
- 写真3 前池地区 掘立柱建物
S B-01~03(北より) 11
- 写真4 前池地区 S B-01
柱穴内土器出土状況 11
- 写真5 前池地区 掘立柱建物
S B-07(南より) 12
- 写真6 前池地区 全景(東より) 12
- 写真7 前池地区
S D-06土器出土状況 12

(龍川四条遺跡)

- 写真8 IV区—②ピット集中部(南から) 14
- 写真9 IV区—②S X01(東から) 14
- 写真10 IV区—②S B02・⑦
土師皿出土状況 14
- 写真11 IV区—②S B01(東から) 15~16
- 写真12 V区—①下層遺構(南から) 15~16
- 写真13 V区—①S T01作業風景 17
- 写真14 V区—①S T01とS D04
(西から) 17
- 写真15 V区—①S T01和鏡出土状況
(北から) 17
- 写真16 V区—①S E01(東から) 20
- 写真17 V区—①S E01曲物出土状況 20

(川津東山田遺跡Ⅰ区)

- 写真18 1区② 全景 25
- 写真19 3区④ 竪穴住居7 26
- 写真20 3区④ 地鎮ピット? 26

写真21 3区① 竪穴住居6 27

写真22 3区③ 竪穴住居5 27

写真23 3区⑤ 井戸底 曲物出土状況 27

写真24 3区④ 全景 28

写真25 6区① 全景 28

写真26 2区③ 全景 28

写真27 4区① 全景 28

(川津東山田遺跡Ⅱ区)

- 写真28 ④、⑤区全景
右下がS R01(北西より) 30
- 写真29 ④区S R01(南より) 33
- 写真30 ⑦区全景 中央付近がS H03
(南東より) 33
- 写真31 ⑤—2、⑦区S H01(南)、S H02(北)
S H01は周溝がめぐる(東より) 33
- 写真32 ⑦区S H03(東より) 34
- 写真33 ②区S E01(北より) 34
- 写真34 ⑤—1区S K01遺物出土状況
(北より) 34

(川津川西遺跡)

- 写真35 W区第2遺構面S D01検出状況
(南より) 41
- 写真36 E区第2遺構面竪穴住居跡全景
(南より) 41
- 写真37 E区第1遺構面全景(南より) 42
- 写真38 E区第1遺構面土師皿出土状況
(西より) 42

(川津中塚遺跡Ⅰ区)

- 写真39 全景(西より) 48
- 写真40 S B01・02、S D04(南より) 48
- 写真41 S B02柱底内遺物出土状況 48

(川津中塚遺跡II区)

- 写真42 遺構検出状態(北部地区) 51
写真43 整穴住居跡伴出遺物 53
写真44 溝状遺構伴出遺物(1) 53
写真45 溝状遺構 54
写真46 溝状遺構伴出遺物(2) 54

(川津下極遺跡)

- 写真47 S R01 井堰検出状況 56
写真48 井堰拡大 56
写真49 井堰断面 56
写真50 水田畦畔検出状況 57

(川津二代取遺跡)

- 写真51 調査前風景(東北から) 64
写真52 自然河川断面 64
写真53 自然河川 遺物出土状況 64
写真54 弥生後期末～古墳前期の溝群 65
写真55 弥生後期末～古墳前期の溝群 65
写真56 弥生後期末～古墳前期の溝
　　遺物出土状況 65

- 写真57 中世遺構完掘状況 66
写真58 中世掘立柱建物跡 66
写真59 中世溝 遺物出土状況 66

(川津一ノ又遺跡I・II区)

- 写真60 調査地全景 調査地は林の手前
　　(西より) 69
写真61 第7トレンチ(南東より) 69
写真62 第6トレンチ(北東より) 69
写真63 川津一ノ又遺跡II区遠景
　　(調査後) 70
写真64 第3トレンチ 南壁 72
写真65 第6トレンチ③ 東壁 72
写真66 第6トレンチ 調査風景 72

(川津一ノ又遺跡III区)

- 写真67 集落域西半全景(北より) 74
写真68 弥生時代終末頃の川跡 76
写真69 弥生時代終末頃の川跡 76
写真70 多量に捨てられた土器 76
写真71 多量に捨てられた土器 76
写真72 方形整穴住居跡 77
写真73 掘立柱建物跡 77
写真74 張り出し付き円形整穴住居跡
　　(南東より) 77
写真75 木樋を使った水口跡(北西より) 78
写真76 大畔跡と木樋を使った水口跡
　　(西より) 78
写真77 中世の水田跡(南より) 79
写真78 土壌基(南より) 79
写真79 鍋と杯(中世)(西より) 80
写真80 作業風景 80

(川津一ノ又遺跡IV区)

- 写真81 S B01 84
写真82 S D10 84
写真83 S D10 84
写真84 S D10 84
写真85 S H11 84
写真86 S H09・10 85
写真87 S H20 85
写真88 S H30と竪穴住居群 85
写真89 S H30と竪穴住居群 85
写真90 縦柱建物群(S B46・47・50) 86
写真91 S B49・51 86
写真92 鐵跡 86
写真93 木樋 86

(国分寺楠井遺跡)

- 写真94 調査区北東部全景(矢印S F01) 95

- 写真95 作業風景 96
写真96 S F03物原遺物出土状況 96
写真97 S F01窯体内遺物出土状況 100
写真98 S F01窯体完掘状況 100
写真99 S F01窯体断ち割り状況 100
写真100 S F02天井部崩落状況 101
写真101 S F02窯体内遺物出土状況 101
写真102 S F02窯体完掘状況 101

(中間西井坪遺跡)

- 写真103 塚輪焼成土坑出土陶棺 110
写真104 円筒埴輪
(左: 4 a 区 右: 3号墳) 110
写真105 3 a 区 旧石器出土状況
(東から) 113
写真106 3 a 区 土層堆積状況 113
写真107 塚輪焼成土坑
(後方建物・溝は中世後半) 113
写真108 塚輪焼成土坑完掘状況
(後方谷底部は廃棄土器群) 113
写真109 3 b 区 1号墳
(前面は旧石器出土状況) 113
写真110 5 区 2号墳全景
(手前は3号墳) 113
写真111 5 区 大形竪穴住居陶棺等
出土状況 114
写真112 竪穴住居出土盾形埴輪 114
写真113 竪穴住居出土陶棺片 114
写真114 3 a 区出土旧石器(表面) 114
写真115 3 a 区出土旧石器(裏面) 114

I 平成2年度発掘調査事業概要

昭和63年度に始まった四国横断自動車道（高松～善通寺）の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業も3年目を迎えた。今年度当初は、高松・善通寺間の発掘調査完了を目指して開始したが、調査対象地の問題から、今年度の発掘調査面積は最終的には131,980m²となり、来年度も若干の発掘調査対象地が残ることとなった。

龍川五条遺跡では、昨年度の調査で弥生時代前期の墓域と環濠に囲まれた集落域などを検出した。今年度は、自然河川と、条里坪界線と一致する古代の溝等を検出した。南部調査区では前池の現堤防の下部で、昨年度検出した環濠の続きを検出した。

龍川四条遺跡では、昨年度未買取地として残っていたB地区の一部を調査し、昨年度同様古代から中世にかけての集落遺構と土壙墓を検出した。

川津中塚遺跡は、下川津遺跡に南接する。北部のI区では、下川津遺跡の南端の調査区で確認した7世紀代の建物群と弥生時代後期後半から古墳時代後期にかけての用水路と考えられる大規模な溝、中世の建物跡群を検出した。南部のII区では弥生時代後期後半の竪穴住居跡と、I区で検出したものの続きと考えられる弥生時代後期から古墳時代後期にかけての溝、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡群を検出した。

川津下樋遺跡は、中塚遺跡の南にほぼ隣接する。弥生時代前期から中期前半にかけてと考えられる水田跡と、これに隣接する自然河川内から同時期の井堰を検出した。

川津二代取遺跡は、下樋遺跡と大東川に挟まれる。自然河川と多条の溝を検出した。この中で弥生時代後期の溝が北上し、下川津遺跡で検出した同時期の基幹水路に概ね連なるものと考えられる。また二代取遺跡では鎌倉時代の集落跡も検出している。

川津一ノ又遺跡は、大東川の南に位置し、飯野山北麓から大東川以南の弥生時代から中世にかけての代表的な集落遺跡で、大東川下流域の下川津遺跡に匹敵する規模の遺跡である。今回の調査対象地は東西及び南を自然河川で限られ、地形的にまとまりを有する集落がほぼ全面調査された。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての集落跡とともに、大東川の下流域では初めて、弥生時代中期の竪穴住居跡群を検出した。古墳時代後期集落においては、竪穴住居の形態等で、下川津遺跡とは様相が異なり注目される。南部で検出した土手状遺構とそれに付帯する木樋も古代の水利や土地開発を考える上で重要な資料となるものである。

川津東山田遺跡I区は、飯野山の北麓に立地し、一ノ又遺跡とは県道を挟み南に隣接する。弥生時代後期の竪穴住居跡群を検出した。竪穴住居跡は円形のものが多い。東のII区では、古墳時代後期の竪穴住居跡を検出した。

川津川西遺跡は、飯野山の北東に位置し、古墳時代後期の竪穴住居跡と古代から中世にかけての集落跡および古代から鎌倉時代にかけての大規模な溝を検出した。この溝は一ノ又遺跡の様相

とも合わせ、古代の水利関係を明らかにする遺構として注目される。

府中地区は概ね丘陵部で、時期不明の土坑等を数基確認したのみで、良好な遺構の残存は認められなかった。

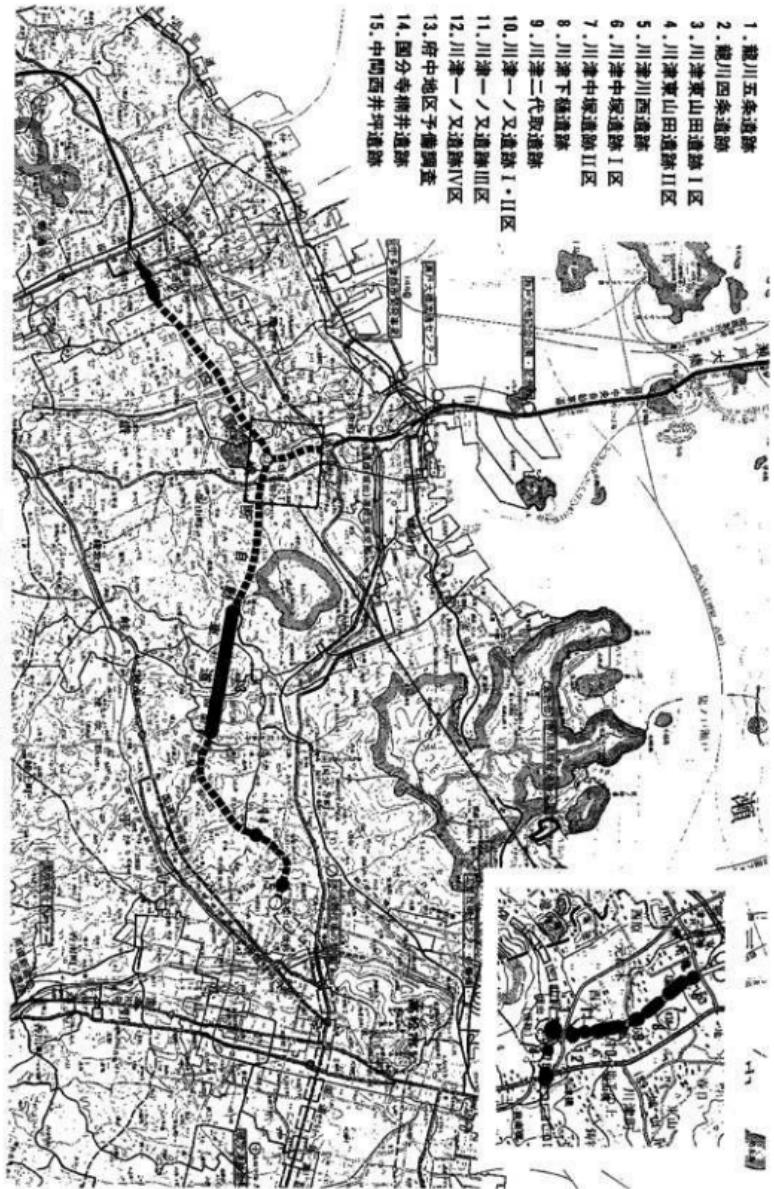
国分寺塚井遺跡は、昨年度調査を実施した六ッ目古墳の西に位置する。横穴式石室を持つ円墳1基と室町時代の土師質と瓦質の土器を生産した窯跡を検出した。

中間西井坪遺跡の今年度の調査は、昨年度調査地区の西に位置する。AT火山灰の上位から舟底形石器と小型のナイフ形石器を主体とする良好なブロックを検出した。古墳時代の遺構は、いずれも前期のもので、小型の前方後円墳と円墳の基底部、埴輪・陶棺などを焼成した野焼き土坑・陶棺を収納した大型の竪穴住居跡などを検出した。

今年度の調査では、川津川西遺跡で写真用足場の倒壊という予想もしなかった事故が発生した。事故にあわれた方々の御冥福と御回復をお祈りするとともに、今後の調査実施においては、安全面に万全を期したい。

遺跡名 所在地 調査面積 調査期間 遺構 遺物 担当者 備考						
龍川五条遺跡	普通寺市原田町	10,200m ²	2.4.9~2.12.5	弥生時代前期 柱・環濠・自然河川、東里溝	弥生土器・石器・木器、須恵器・土師器	森下英・大林・白川
龍川四条遺跡	普通寺市原田町 木場町	1,700m ²	2.5.28~2.10.24	古代~中世 櫛立柱建物址 鳥・溝	須恵器・土師器 鐵(和銛)・鐵器・瓦器	森下英・大林・白川 平成3年度 300m ²
川津東山田遺跡	板出市川津町	28,100m ²	2.8.2~3.3.20	弥生時代~中世 物址・豎穴住居址・溝	弥生土器・須恵器・土師器 器・葉巻土器	金丸・岡・森下友・中野・和 田・大谷・松尾・藤野・眞鍋昌
川津西邊跡	板出市川津町	5,400m ²	2.5.10~3.1.17	弥生時代~中世 物址・堅穴住居址・溝	弥生土器・須恵器・土師 器・壺・土器・耳環・土馬	森川・瀧今
川津中塚遺跡	板出市川津町	15,290m ²	2.5.10~3.2.28	弥生時代~中世 物址・堅穴住居址・溝・土坑	弥生土器・須恵器・土師 器・耳環	西村・西園・眞鍋昌・石 川・阿河
川津下塚遺跡	板出市川津町	9,650m ²	2.5.10~3.1.31	弥生時代~中世 物址・溝・自然河川	弥生土器・須恵器・土師器 片桐・大西・白川	平成3年度 200m ²
川津二代古道跡	板出市川津町	10,400m ²	2.5.10~3.3.8	弥生時代~中世 物址・溝	弥生土器・須恵器・土師 器・石器	牧野・木下・塙田・白川
川津一ノ又遺跡	板出市川津町	35,160m ²	2.4.12~3.3.28	弥生時代~中世 柱・環濠・堅穴住居址 柱・溝・水田	弥生土器・須恵器・土師 器・石器・木製品	庄浦直・福松・西村・森 下友・古野・山下・中野・ 和田・大谷・出村・鶴原・ 高橋・石川・尾形
脅中地区	板出市脅中町	3,000m ²	2.10.30~2.12.26	時代不詳 柱穴・土坑	須恵器・耳環 器・瓦質土器	瀧邊・佐藤
国分寺楠井遺跡	接続都匠分寺町富家	4,400m ²	2.4.11~2.10.2	古墳時代 中世 土師器類・櫛立柱建物址	旧石器・古墳時代 土坑・古墳3基・堅穴住居址 中世 櫛立柱建物址等	須恵器・耳環・須恵器・ 土師器・陶棺
中間西井戸遺跡	高松市中間町	8,680m ²	2.5.10~3.3.25	—	—	鶴井・大久保・萬木・尾方 吉輝・3基内1基 は前方後円墳?
計		131,980m ²				平成3年度 9,200m ²

1. 龍川五条道路
2. 龍川四季道路
3. 川津東山田道路 I 区
4. 川津東山田道路 II 区
5. 川津川西道路
6. 川津中坂道路 I 区
7. 川津中坂道路 II 区
8. 川津下幡道路
9. 川津二代坂道路
10. 川津一ノ又坂道路 I・II 区
11. 川津一ノ又坂道路 III 区
12. 川津一ノ又坂道路 IV 区
13. 市中地区予備調査
14. 国分寺橋井道路
15. 中間西井町道路



第一圖 調査道路位置図

II 各遺跡の調査

1. 龍川五条遺跡

(1) はじめに

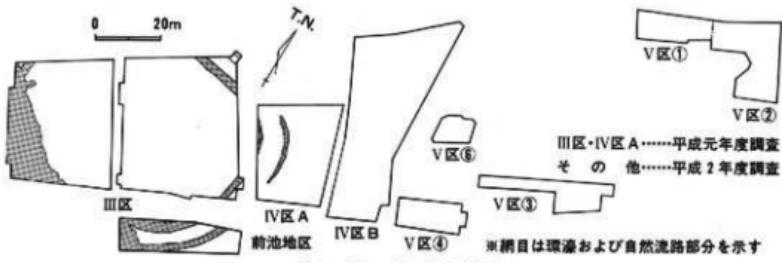
本遺跡は昨年度（平成元年度）の調査によって、弥生時代を主体とする複合遺跡であることが確認されている。中でも弥生前期の2重に巡る環濠及びその内外に存在する土塙墓・木棺墓・周溝墓等の墳墓資料は、注目すべき成果として挙げられる。

本年度の調査は昨年度調査地東側の未退去家屋部分等を対象として実施した。また、遺跡の南に隣接する前池の堤防部分については、本体工事で堤防盛土が除去された箇所に限られたが、その下位に残る遺構面の調査を実施した。調査区割は昨年度の区割を継承してIV区B・V区とし、堤防部分については前池地区とした。なおV区については家屋の退去が終了した区画毎にトレンチを入れ、遺構遺物が確認された区画にそれぞれ①からの番号を付し、面的に括げて調査を行なった。

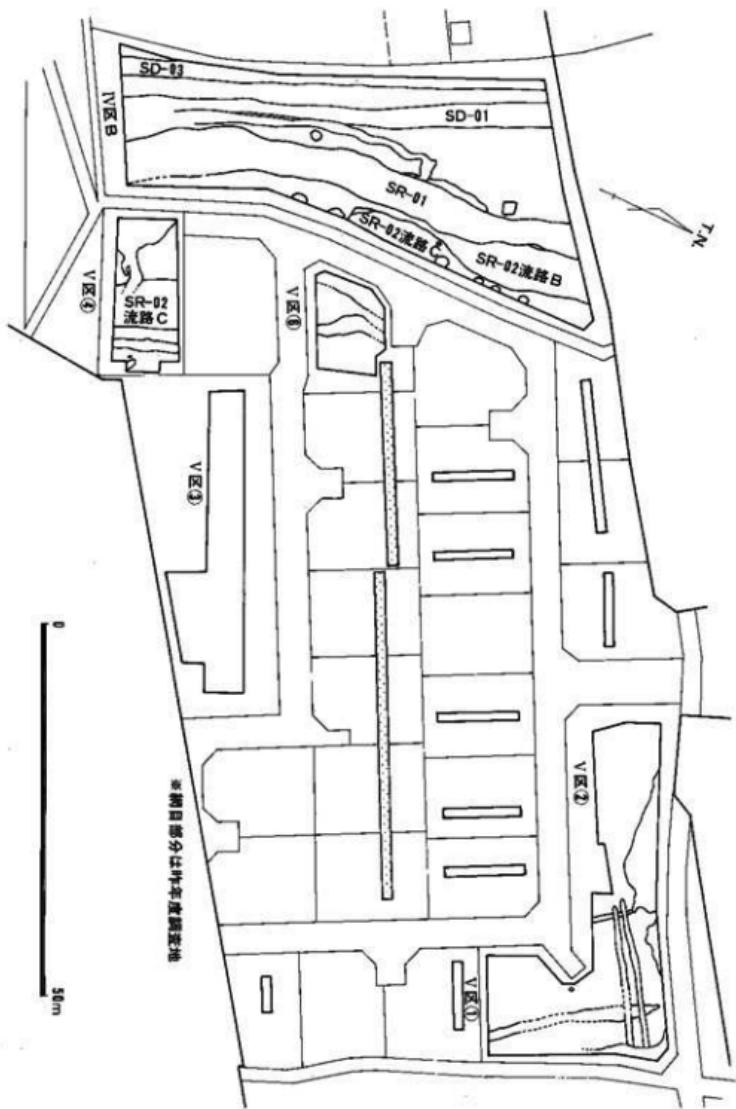
以下、各調査区ごとの概要を記す。

(2) IV区B

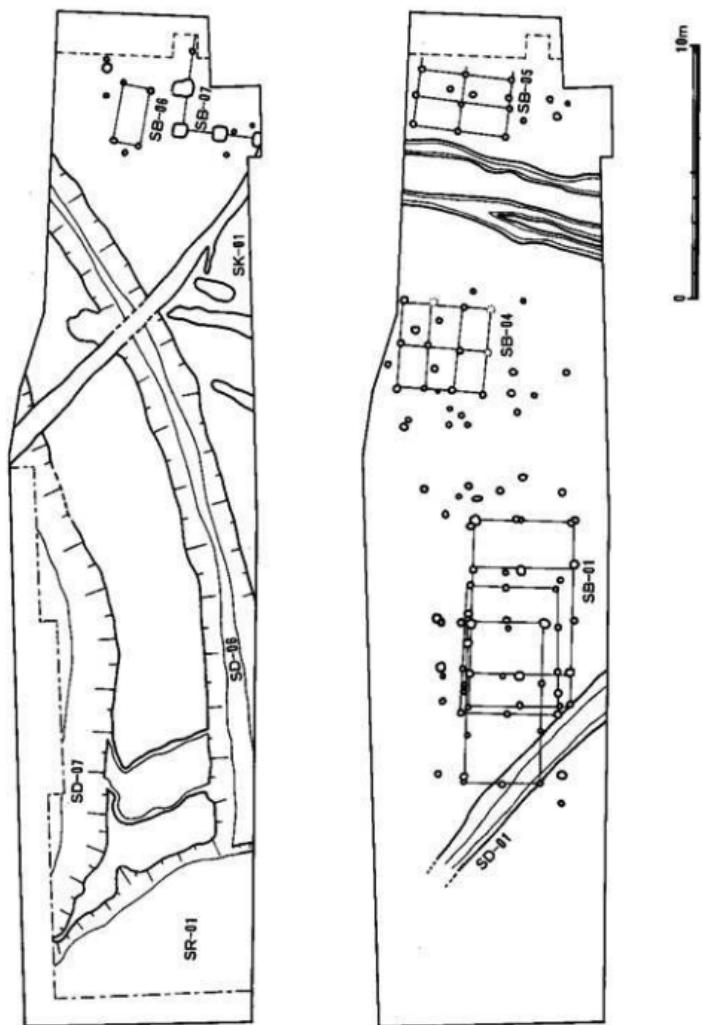
調査区の東半では弥生前期から中世に亘る各時期の流路を検出した。これらは、概ね南から北に走行し、弥生前期の流路（SR-02流路C）、弥生後期～奈良時代の流路（SR-02流路B）、中世の流路（SR-01）に大別される。SR-02流路Bの下層では木製品が出土している。調査区の西半では条里地割の方向性を持って並走する2条の溝（SD-01・03）を検出した。この溝からは平安時代の上器が出土している。近世の造構としては井戸や水溜め用の円形土壙などがある。



第3図 調査区割図



第4図 IV区B、V区主要道路及びトレーニング配置図



第5圖 前地地區主要勘探佈置圖

(3) V区

トレンチ調査の結果、遺構密度はきわめて希薄であることが判明した。東側の区画(①②)では中近世の落ち込みや溝が主である。西側の区画(④⑥)では、IV区BにつづくS R-02流路Cを検出した。流路の両肩に幅1m余りのテラスを持ち、底部がかなりフラットな形状を有することから、人工的に掘削された大溝の可能性もある。

(4) 前池地区

調査区西半では遺構面が2面あり、平安後期から中世の遺構面と弥生前期の遺構面に分けられる。前者では平安後期の掘立柱建物(S B-01~03)、中世の溝(S D-01)などがみられる。後者では昨年度調査区のIII・IV区からつづく2重に巡る環濠(S D-06・07)が検出された。さらに西端で、昨年度のII区III区間の流路と同じ流れと見られる自然流路(S R-01)を検出した。これらの環濠と自然河川に切り合はれ認められず、同時に存在し合流していたものと見られる。なお、環濠の外に位置する調査区東端で弥生前期の土壙(S K-01)と、おなじ時期の可能性が高い掘立柱建物(S B-07)を検出した。

(5) 小結

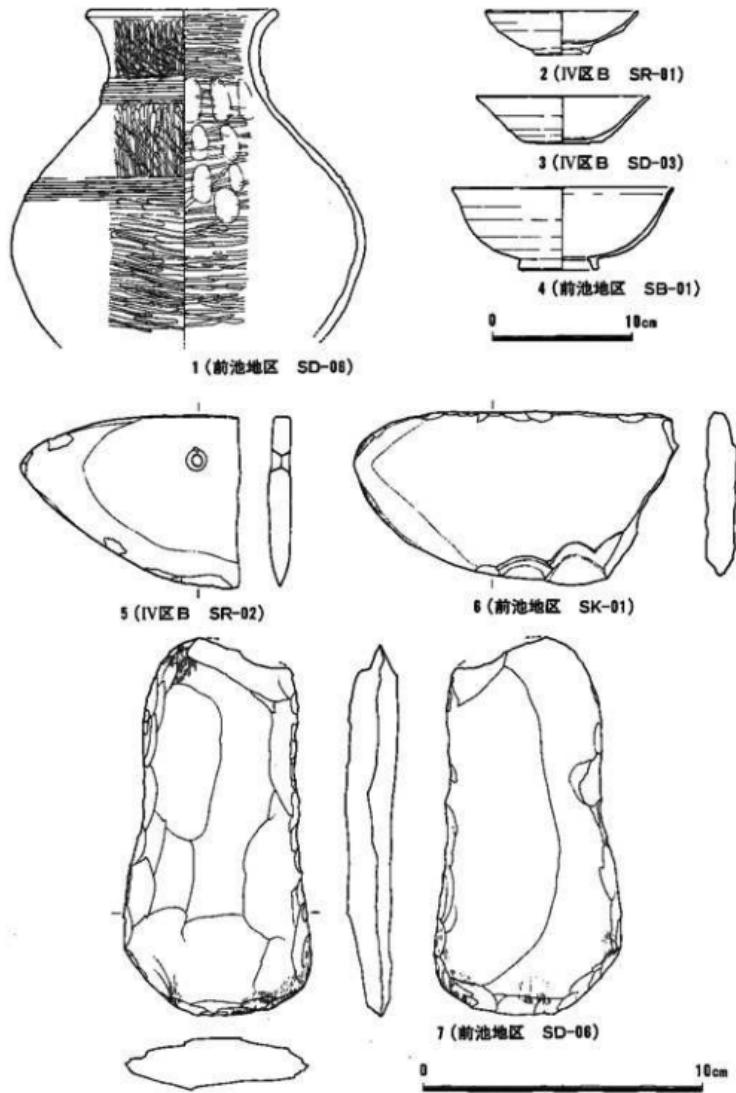
今年度の調査によって、龍川五条遺跡の東縁部の状況が明らかとなった。IV区B調査区において各時期に亘る流路が検出され、V区調査区では遺構の分布が希薄であった。これによって遺跡の東限がほぼ確定できるものと考える。

また、昨年度の調査で弥生前期の環濠と判断された2条の溝が、今年度の前池地区において弧を描きながら自然河川に合流して収束することが判明し、環濠の南限が把握できると同時に、弥生前期の本遺跡が、一部に自然河川を取り組んだ形態の環濠集落であることが確定的となった。環濠の北限については今以て不明であるが、昨年度のIII区北西隅において、前池地区と同じように自然河川に合流する溝が検出されており、これが北側の収束点である可能性がより高くなった。

以上を踏まえて環濠のプランを復元すると、長辺約80m、短辺約60mの東西に長い隅丸の長方形と推定される。

号	種 別	法 量 (cm)	色 調	特 徴
1	弥生式土器 壺	口径13.4 腹部径25.3 高(23.5)	乳灰黄色	頸部・腹部に輪広の削出凸帯。凸帯上に2条の沈線文。
2	土 師 器 橢	口径11.0 高3.2	灰褐 色	内外面回転ナデ調整。断面三角形の貼付高台。
3	土 師 器 环	口径12.2 高3.4	淡 灰 色	内外面回転ナデ調整。底部へラ切り。
4	土 師 器 橢	口径15.8 高5.9	灰褐 色	内外面回転ナデ調整。断面台形貼付高台。見込み部打欠。
5	磨 製 石 斧 丁	幅6.2 厚0.8 孔径0.4	淡 灰 色	安山岩製。半欠。
6	磨 製 石 斧 丁	幅6.3 厚1.1	淡 灰 色	未製品。安山岩製。側縁部磨研。刃縁部に調整削痕残す。
7	石 錐	長13.5 幅6.7 厚1.8	灰 白 色	安山岩製。横長剝片素材。刃縁と基部に擦痕。

第2表 出土遺物観察表



第 6 図 出土遺物実測図



写真 1 V区④ SR-02 流路C（北より）



写真 2 IV区B 流路群（南より）

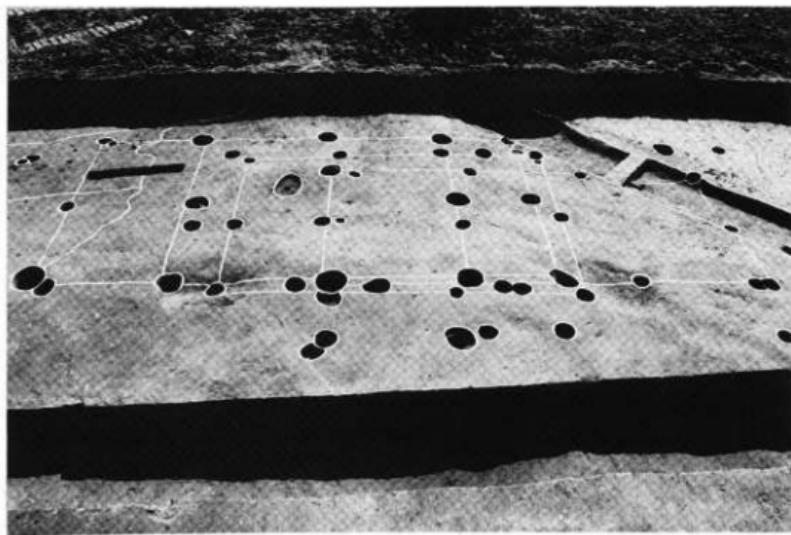


写真3 前池地区 据立柱建物 SB-01～03（北より）

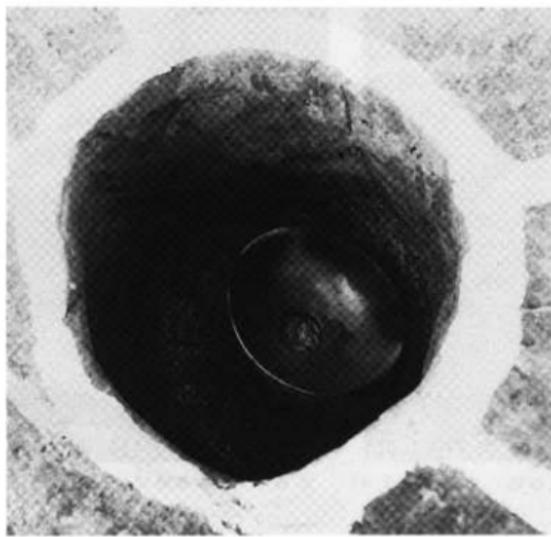


写真4 前池地区 SB-01 柱穴内土器出土状況

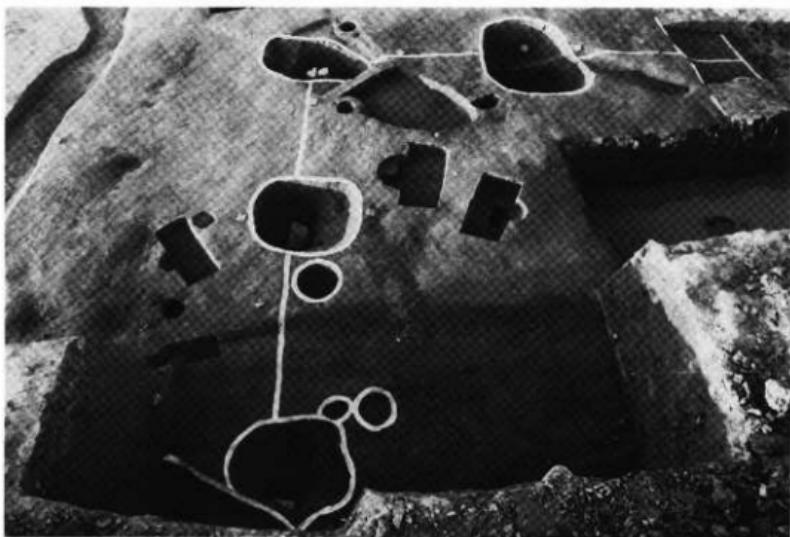


写真 5 前池地区 掘立柱建物 SB-07 (南より)



写真 6 前池地区 全景 (東より)



写真 7 前池地区 SD-06 土器出土状況

2. 龍川四条遺跡

調査の概要

本遺跡は、平成元年度の調査により鎌倉時代の集落跡であることが判明した。今年度は、市道原田・四条1号線をはさむ東西2か所の調査となった。検出した主要な遺構について略説する。

S B01 西側の旧河道によって形成された自然堤防上に位置する、 2×3 間の建物遺構で、主軸方位をN 20° Eにとる。遺物を伴出していないので時期は不明であるが、埋土から奈良時代以前にさかのぼるものと考えられる。

柱穴内には、柱根も一部確認されており深さは、現状で40~50cmである。

S B02 ほぼ正方形の平面プランをもつ建物である。中央部のピットは他の柱穴と比較して浅く土師質土器の杯・小皿片が積み重なって出土した。これは建物にかかる祭祀的な性格をもつものと考えられる。

S X01 平面楕円形の性格不明遺構で主軸方位をE 14° Nにとる。数個の河原石（一部は割れ石）を上層で検出した。細片の土器と埋土から中世と考える。形状が長方形にちかくいわゆる廐棄土坑とは性格を異にすると考えられる。

S T01 墓壙の平面形は楕円形で長軸1.25m、短軸0.85m、深さ0.3mを測り、主軸方位をN 32° Wにとる。10~20cm程度の河原石が浮いた状態で全体に検出された。墓壙の西側で和鏡とその直上で青磁片が出土した。これらは副葬品と考えられる。

S D04 S T01をめぐる溝。下端のレベルの検討によって西から南方向へと低くなる。細レキー中レキがかなり多く埋土中に認められる。

S E01 歪んだ円形の井戸で深さは1.9mである。掘り方の底に曲物を井筒として2段重ねて据えていた。曲物の裏込め土中より13世紀後半の瓦器が出土した。

S D08 弥生時代後期の溝である。深さは約1.1mである。

本年度調査によって龍川四条遺跡は路線内で東西方向に約80mの広がりをもつ集落であったことを明らかにでき、13~14世紀前半における木徳庄の一部であったと考えられ、また、これまで塚・寺院跡を除く県内の中世前半期の墓資料は26例を数えるが鏡を副葬品として持つものは坂出市の下川津遺跡^注に一例あるにすぎない。したがって土壙墓（S T01）は集落内の高い階層者の墓といえよう。



第7図 遺跡周辺地形図

註 香川県教育委員会・鰐谷川県埋蔵文化財調査センター『瀬戸人蔵建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』下川津遺跡調査報告書 1990-3

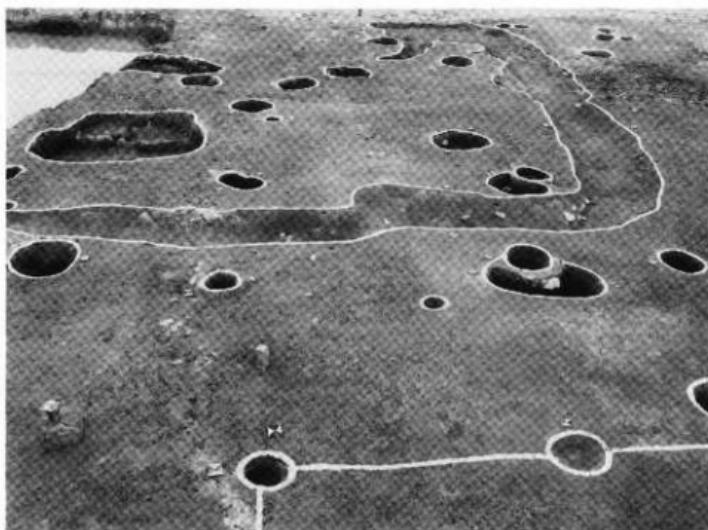


写真 8 IV区-②ピット集中部（南から）



写真 9 IV区-②S X 01 (東から)



写真 10 IV区-②S B 02・⑦
土師皿出土状況

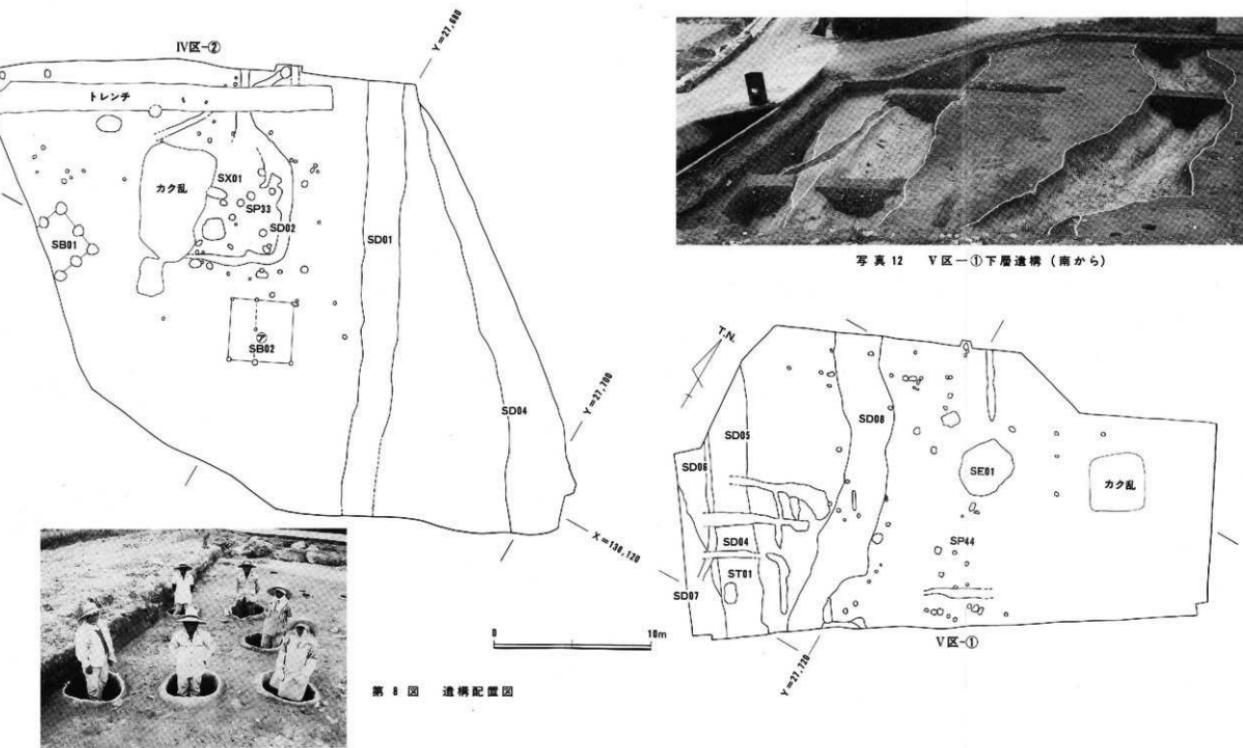


写真 11 IV区-② SB01 (東から)

写真 12 V区-①下層遺構 (南から)



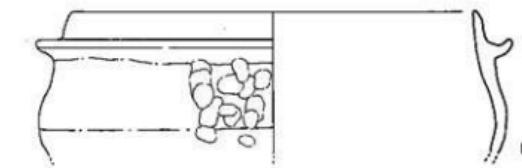
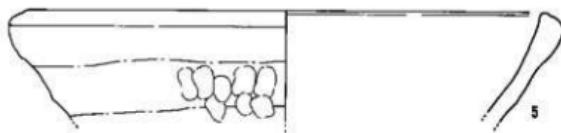
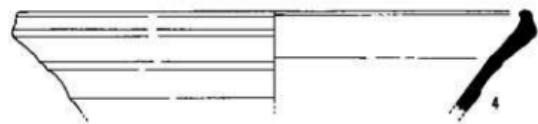
写真 13
V区-①ST01 作業風景



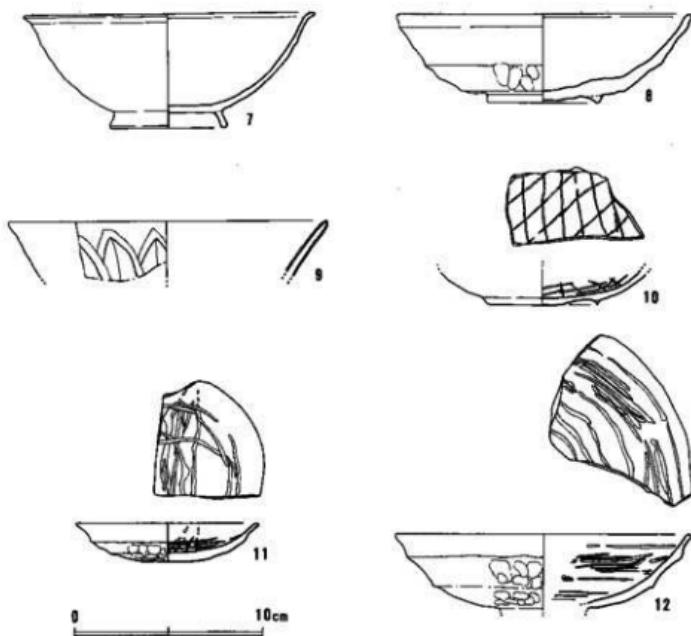
写真 14 V区-①ST01 と SD04 (西から)



写真 15
V区-①ST01
和鏡出土状況 (北から)



第 8 図 遺物実測図 IV区-②



- | | |
|------------------|------------------|
| 1・2 SB02-② 土師質土器 | 3 備前焼 小壺 |
| 4 SP33 東播磨系須恵器 | 5・6 SD02 土師質土器 |
| 7 SD05上層 土師質土器 | 8 SP44 土師質土器 |
| 9 ST01 龍泉窯系青磁 | 10～12 SE01 磁内産瓦器 |

第10図 遺物実測図 V区-①



写真 16 V区-①SE01(東から)



写真 17 V区-①SE01曲物出土状況

3. 川津東山田遺跡 I 区

当遺跡は飯野山北麓、標高約10m～23mに位置し、北側を県道富熊・宇多津線が通る。調査地は1～6区の大区を設定し、その中を①～⑤小区に分割して行った。1～3、6区は比較的高差が少ないが、3区より山側である4、5区では、傾斜がかなり急になる。

調査の結果、東～南側と西側で自然河川（谷筋）を検出し、それに挟まれた微高地上から掘立柱建物、竪穴住居、溝などの遺構群を検出した。尚、山手の4、5区では遺構は希薄であり、集落は3区を中心広がっていたと考えられる。



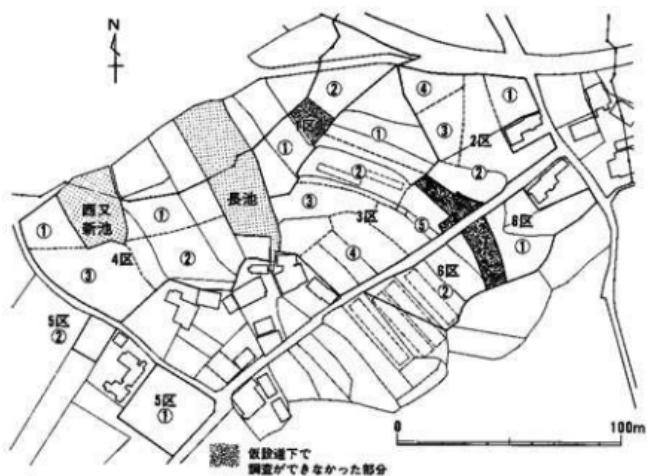
第11図 遺跡周辺地形図

遺構の時期について現在検討中であり、掘立柱建物、ピット群に関しては時期を把握するに至っていないが、凡そ弥生後期を中心とするものと、奈良～鎌倉時代のものにわけられよう。

弥生後期の遺構としては、竪穴住居9棟に溝数条があり、これに數棟の掘立柱建物が伴うと考えられる。竪穴住居は多くが微高地の縁辺に立地し、大半が後の自然河川により一部を削られている。竪穴住居については、他にも竪穴住居を囲う崖溝と思われる溝を3条ほど検出しており、他にも3棟ほど存在したと考えられるが、後世の擾乱などで確認できなかった。その他特筆すべき遺構としては、鉢を3つ重ねて埋納したピットを検出している。地鎮の為のものと考えられる。調査地の東から南側では、この時期の黒色粘土層が厚く堆積し、当時は低湿地であったと考えられる。この黒色粘土層からは、弥生後期を中心とする土器が大量に出土した。

その他では、古代の遺構として溝数条、井戸1基がある。井戸は直径2.3m、深さ1.4mと小規模のもので、底部に曲物をもつ。埋土中からは奈良時代の土師器皿が出土した。南北に流れる幅4mの溝からは、平安前期頃の土器が多く出土している。この溝と方向が同じものは、出土遺物から考えても、ほとんどこの時期のものであろう。土坑・ピットの一部からは、平安末期～鎌倉時代の土師器杯、小皿等が出土している。又、西側と東側の弥生後期の低湿地へ流れ込む自然河川（谷側）から、平安末期を中心とする土器群が出土しており、この時期に調査地の両側に立地した弥生後期の集落の一部を割り取ったと考えられる。

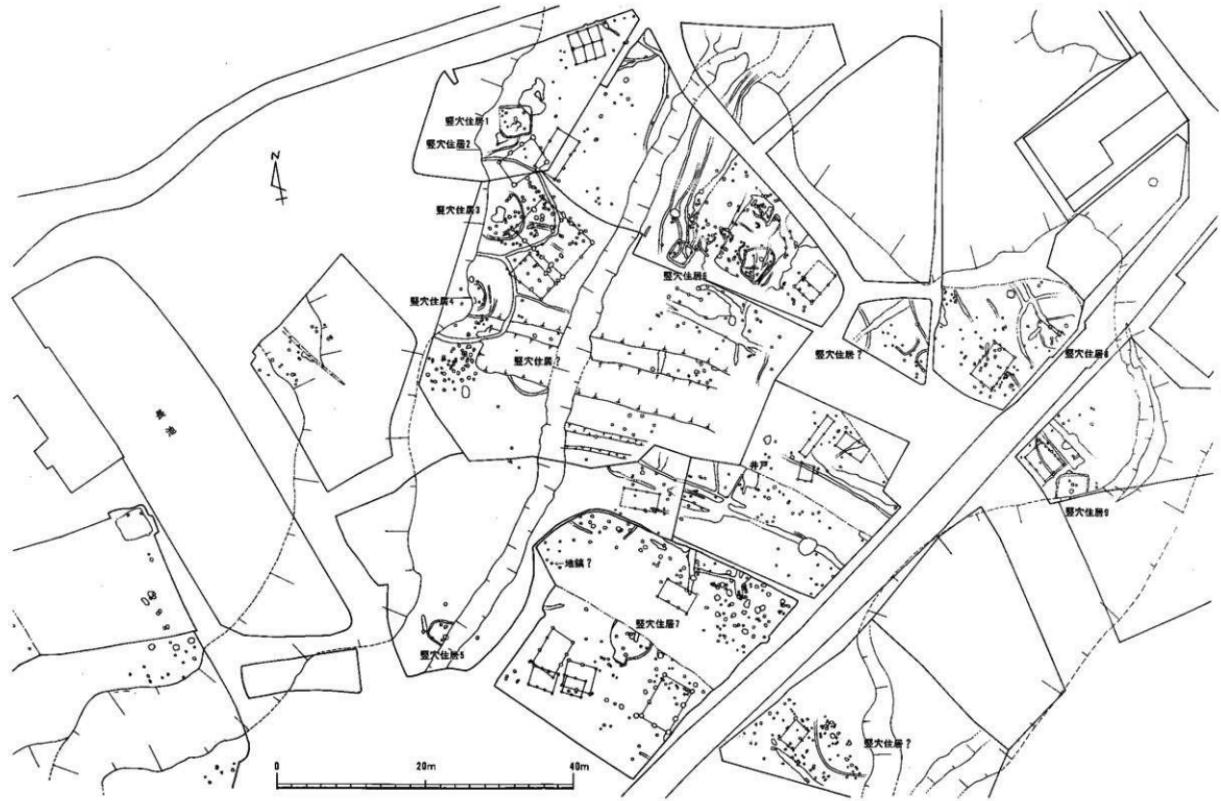
集落の中心部分が一部現在のビニールハウスにより搅乱をうけていたものの、今回の調査によって、弥生後期から鎌倉時代にいたる集落を確認した。今後、個々の遺構の詳しい検討を行い、川津東山田遺跡 I 区の集落の変遷を明らかにすると共に、川津地区における当遺跡の位置付けを行う必要があろう。



第 12 図 地区割図

縦穴 番号	平面形	規 模	主柱穴	炉	壁溝	そ の 他
1	方 形	4.4m(一辺)	4	有	有	3 方にベット状造構をもつ
2	方 形	4.4m以上(一边)	?	有	有	縦穴住居 1 に切られる
3	円 形	約 5 m → 6.8 m (直径)	5 以上 (10前後?)	有	有	1 ~ 2 回の拡張 周溝が巡る(直径約 12 m)
4	円 形 (隅丸方形?)	4.8 m → 6.8 m (直径)	4	有	有	1 ~ 2 回の拡張(直径 12 ~ 14 m) 周溝(一部縦穴住居 3 と共有)が巡る
5	円 形	3.4~4m ? (直径)	4 ?	有	有	
6	方 形	3 m (一辺)	4	無	有	
7	円 形	6 m (直径)	4	有	有	張り出しを持つ 炉に接する土坑より光形の壺出土
8	長 方 形	3.5 × 5 m	4	有	有	周溝が巡る(直径約 10 m)
9	方 形	4.3m (一辺)	?	有?	有	

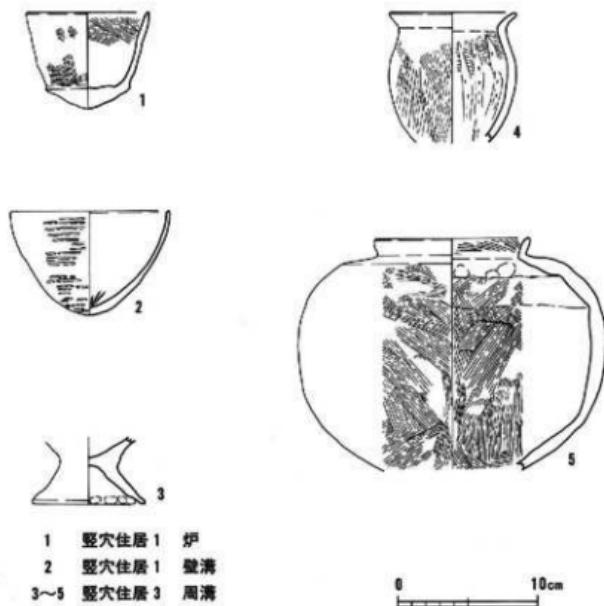
第 3 表 縦穴住居一覧表



第13図 主要造構配置図



写真 18 1区② 全景



第 14 図 遺物実測図

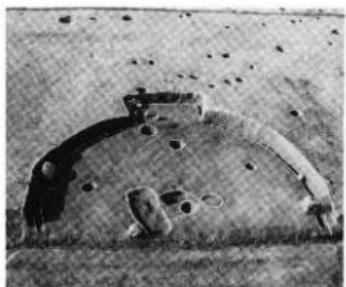


写真 19 3 区④ 穫穴住居 7

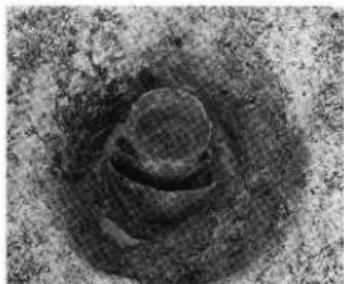
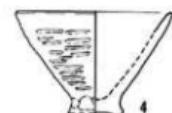
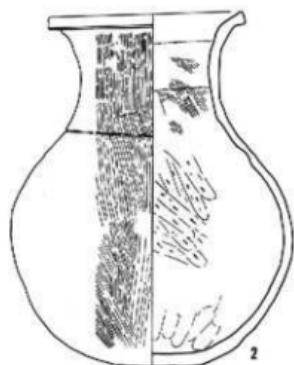
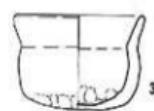


写真 20 3 区④ 地鎮ビット?



3~5 地鎮?ビット

- 1 穫穴住居 7 上部包含層
2 穫穴住居 7 炉に接する土坑

0 10cm

第 15 図 遺物実測図

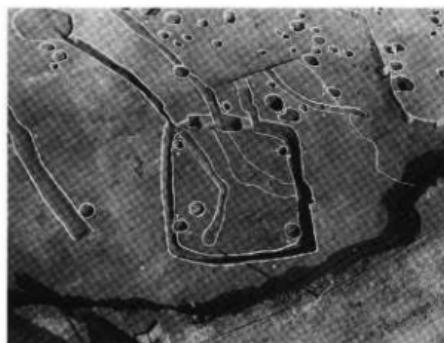


写真 21 3 区① 竪穴住居 8



写真 22 3 区③ 竪穴住居 5



写真 23
3 区⑤ 井戸 底 曲物出土状況



写真 24 3区④ 全景



写真 25 6区① 全景



写真 26 2区③ 全景



写真 27 4区① 全景

4. 川津東山田遺跡II区

当遺跡は、飯野山北東緩斜面の谷部分に位置し、予備調査において地山直上で旧石器を確認した所である。

この旧石器については、包含層（地山直上含む）並びに弥生時代後期から中世にかけての遺物を含む溝状遺構及び旧河道埋土中より確認したが、旧石器の遺構及び地山中からの出土は皆無であった。これらのことから、当遺跡上位に旧石器の遺構もしくは散布地があると考えられる。

溝状遺構は52条を数えたが、この中のS D01からは、曲げ物・墨書き土器〔「井上」〕等が出土している。

墨書き土器については、当遺跡東に隣接する川津川西遺跡より「井南」と記したもの、あるいは当遺跡西に隣接する川津東山田遺跡I区からは环蓋宝珠つまみに花の絵が描かれていたもの等が出土したことから、これら両遺跡と当遺跡とは密接な関係が予想されるが、詳細については、今後検討を加え解明されることになるであろう。

また、掘立柱建物4棟・横列2列を確認したが、遺物量が少なく小片のため、現時点では、時代確定までには至っていない。同じく、土坑・ピットについても十数個確認したが、時代決定までには至らない。今後検討することとする。

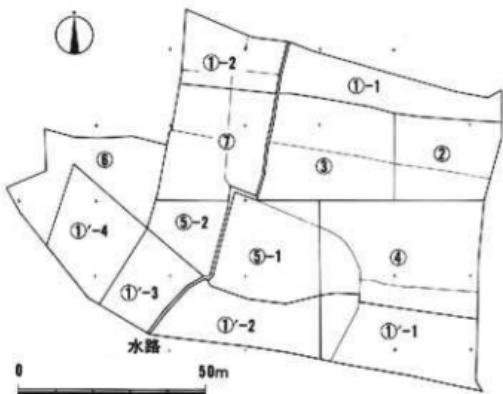
竪穴住居は、3棟を確認したが、全て低地部分（東半分）が削平されていた。このうちSH01はかまどを有し、斜面上位部分には壁溝が巡らされていた。床面上では須恵器が出土している。SH02・03は遺物が皆無に等しかったが、SH03については、SH01と同様に上位部分には壁溝が巡らされていた。

また、旧河川も1本確認したが、埋土中（上層）からは、旧石器から弥生土器・須恵器・土師器に至るまで幅広い時期の遺物が出土していることから、増水等による自然環境の変化により上位遺跡あるいは遺構からの一時的な流れ込みが考えられる。また、下層砂層からは、サヌカイト片（製品は皆無）を数点確認したにとどまった。

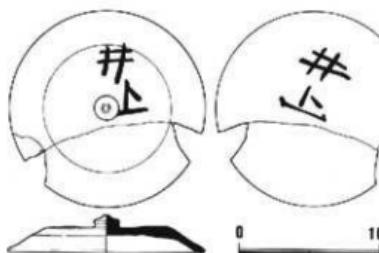
以上のことから、当遺跡は、遺構は希薄であるが、遺物が多岐にわたっており、隣接する遺跡については検討を加えるにあたり重要な位置にあるのではないかと考えられる。



第16図 遺跡周辺地形図



第 17 図 調査区割図 (1/1,500)



S E 03 出土須恵器 (1/4)



③区 出土石帯 (1/2)

第 18 図 出土遺物実測図



写 真 28

④、⑤区 全景

右下が S R 01(北西より)



第19図 造構配置図 (1/500)

写真 29

④区 S R 01 (南より)



写真 30

⑦区全景
中央付近が S H 03
(南東より)



写真 31

⑤-2、
⑦区 S H 01(南)、
S H 02(北)
S H 01は周溝がめぐる
(東より)





写真 32
⑦区 S H 03(東より)



写真 33
②区 S E 01(北より)



写真 34
⑤-1区 S K 01
遺物出土状況(北より)

5. 川津川西遺跡

丸龜平野東端を流れる大東川は、流域の平野部を深く開拓しながら北流して、瀬戸内海へと注ぐ。当遺跡は、この大東川と飯野山に挟まれた河岸段丘上に位置する。調査の結果、縄文晩期～中世に亘る複合遺跡であることが判明した。以下に概要を記す。

縄文晩期後半の突帯文土器は、旧大東川の氾濫堆積層と考えられるシルト層及び砂層中より出土した。これらの土器は、摩滅したものが少なく、時期幅が少ない。またこの砂層は、3 m以上の層厚が認められ、土器はその最上層のシルト層に集中している。以上のことから、縄文晩期を中心とした時に、河川の旺盛な沖積作用があったことが推測される。

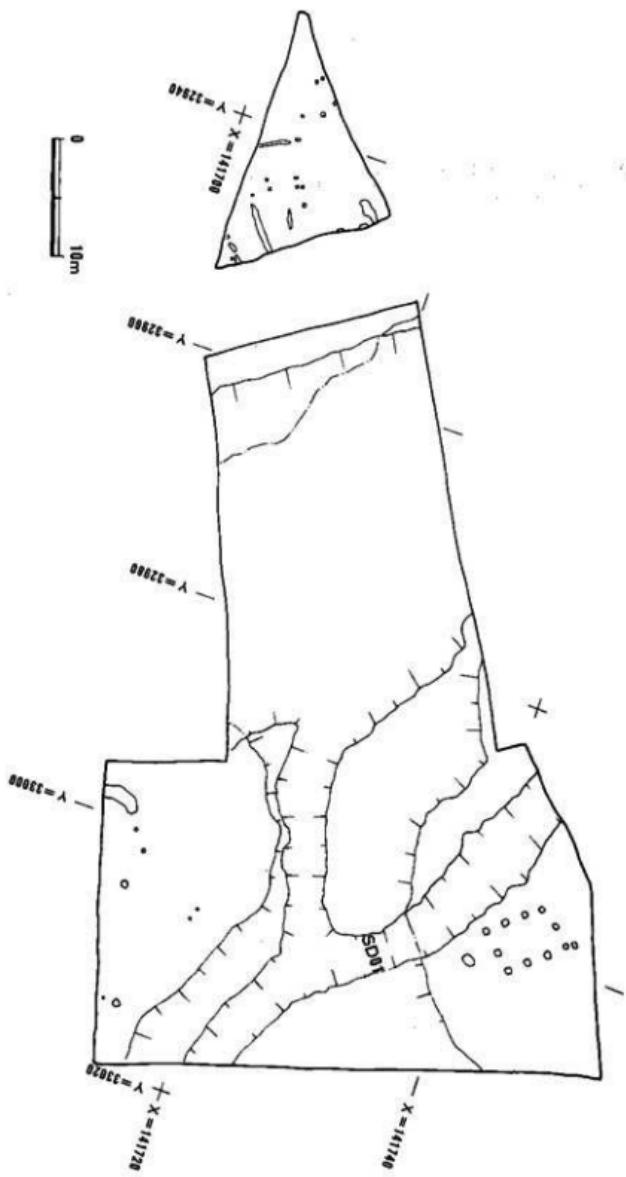
この砂層の上には、弥生後期～古墳後期の遺物を含んだ黒褐色粘土層が堆積していた。上述した沖積作用は停止し、窪地を中心にいくつかの流路が形成され、あるいは湿地状になっていたのであろう。また、微高地上には古墳後期の豊穴住居跡が2棟検出され、小規模な集落域の広がりが認められた。古墳後期の包含層より、土馬や耳環などの祭祀性の強い遺物が出土している。

奈良時代には、W1区に大溝（SD01）が掘削される。この大溝は、西又地区等の大東川西岸の耕地に用水を供給している、現在の幹線用水路の前身と考えられる。この大溝の掘削は、大東川の下刻による水位の低下によって、より上流からの水路の掘削によってしか取水が困難となつたためと考えられ、大東川流域の大規模で計画的な開発の時期が特定できる遺構として重要である。この大溝より「井南」などの墨書き土器が数点出土している。

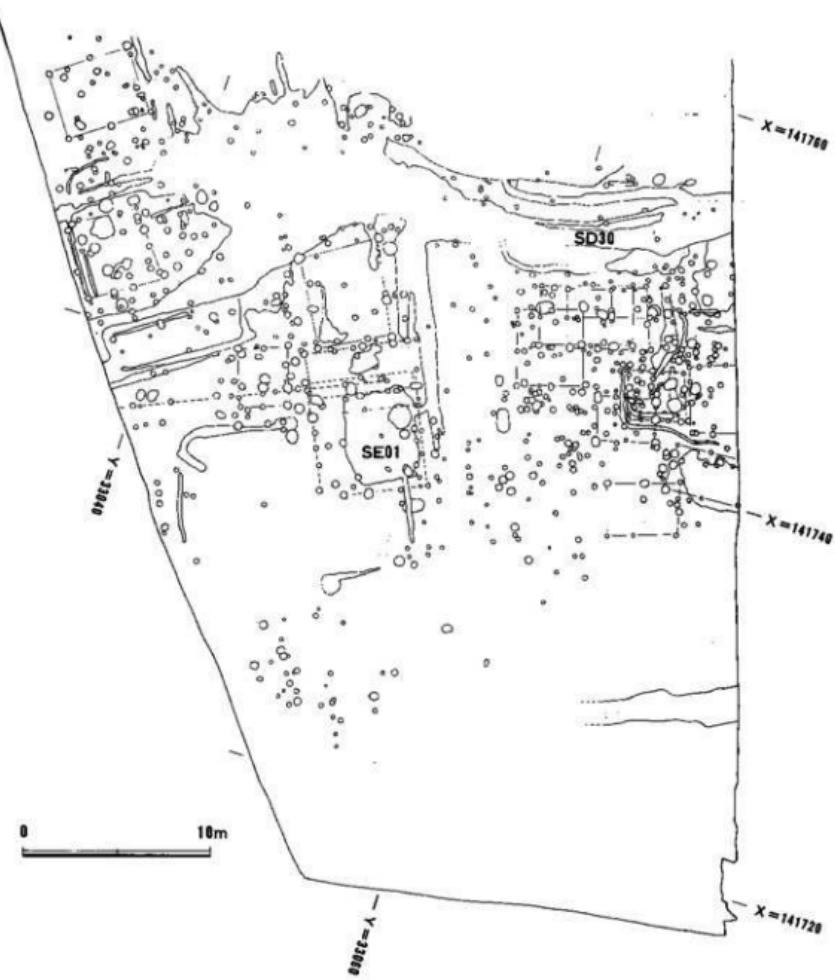
またこの大溝は、13世紀後半には埋没し、現行用水路に掘り直されたと考えられる。E区では14世紀を中心とする集落域が確認されており、おそらく用水の付けかえを契機として成立した新興集落であろう。同時期の集落は周辺の遺跡からも検出されており、灌漑施設の整備等による可耕地の拡大と新興集落の成立がこの地域に及んだことが窺える。出土遺物には、在地産の土師質の羽釜やこね鉢等に加えて、龍泉窯系の青磁碗・瀬戸美濃窯の天目碗・備前焼の摺鉢・東播系のこね鉢・国分寺楠井窯の甕・銅錢・砥石等がある。なおこの集落も15世紀後半には廃絶し、水田等の耕地となるようである。



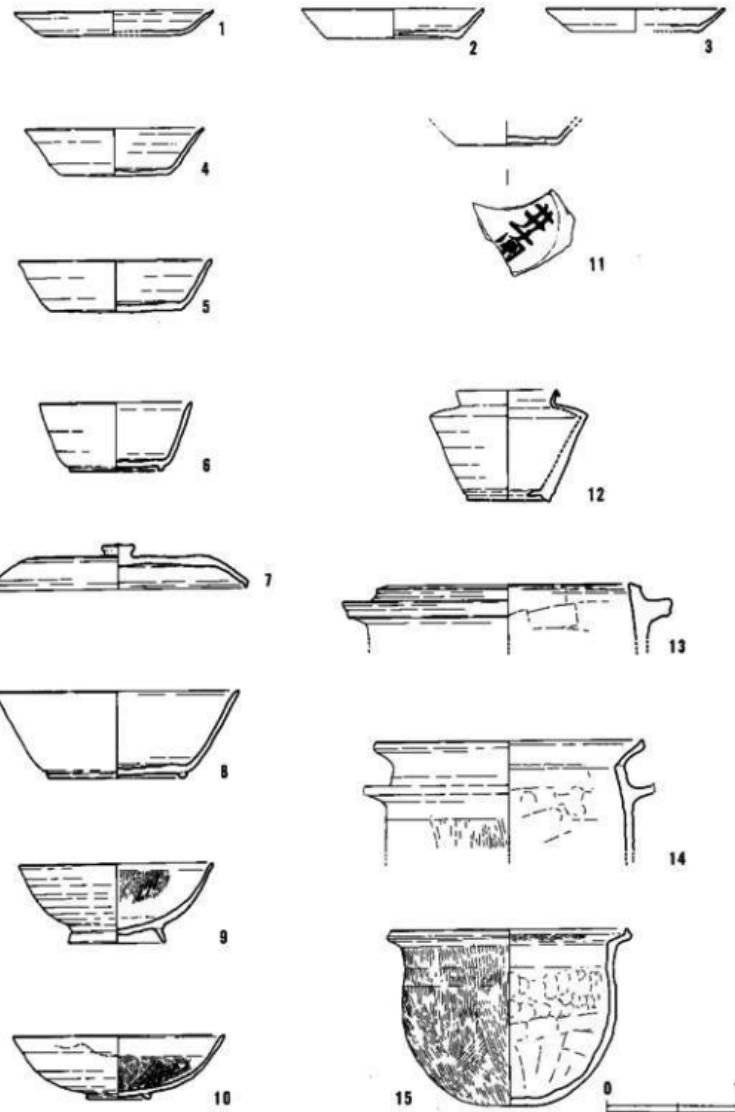
第20図 遺跡周辺地形図



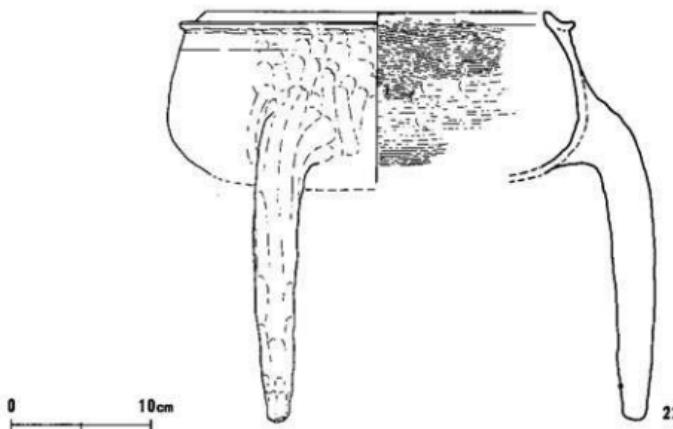
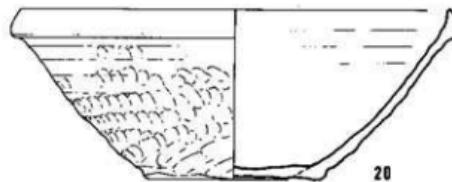
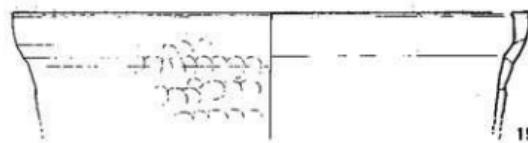
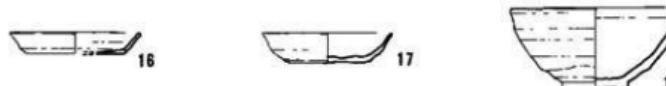
第21圖 W區第2・第3油層面連接剖面圖



第 22 図 E 区第 1 造構面造構配置概略図



第 23 図 W 区第 2 槽構面 S D 01 出土遺物実測図

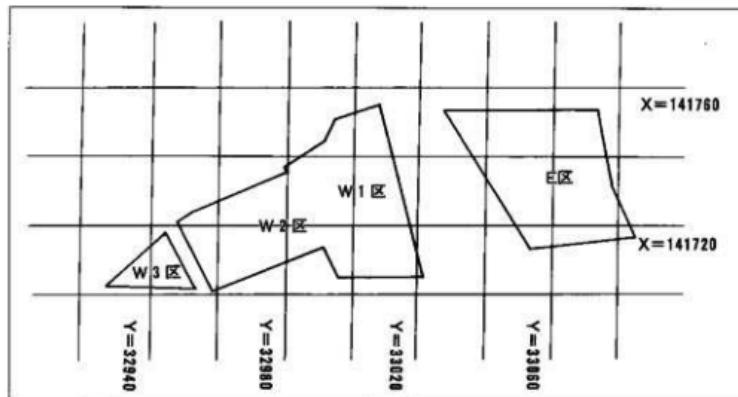


第24図 E区第1造構面出土遺物実測図

番号	調査区遺物名	器種	法量(cm)	地土	色調	調整技法等
1	W1 S D01下層	土師鉢 皿	(口)14.2 (高)1.8 (底)10.0	密	明緑	内面ヨコナデ 底部ヘラミガキ 外面ヨコナデ 底部ヘラおこし
2	W1 S D01下層	須恵器 皿	(口)13.0 (高)2.15 (底)9.6	密	灰	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ
3	W1 S D01下層	須恵器 皿	(口)12.8 (高)1.65 (底)9.0	密	灰	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ
4	W1 S D01下層	須恵器 杯	(口)12.6 (高)3.4 (底)7.6	密	青灰	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ 底部ヘラおこし
5	W1 S D01下層	須恵器 杯	(口)13.6 (高)3.7 (底)9.4	密	灰白	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ 底部ヘラおこし
6	W1 S D01下層	須恵器 杯	(口)10.8 (高)4.85 (底)6.5	密	青灰	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ 底部回転ヘラキリ
7	W1 S D01下層	須恵器 杯蓋	(口)18.2 (高)3.75 (底)2.3	密	灰	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ 底部回転ヘラケズリ 天井部回転ヘラケズリ
8	W1 S D01下層	土師器 杯	(口)17.4 (高)6.2 (底)10.0	密	淡灰黒褐	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ 底部回転ヘラキリ
9	W1 S D01下層	土師器 碗	(口)13.8 (高)5.65 (底)6.8	密	淡灰黒	内面 テテハケの後ナデ 外面 ヨコナデ
10	W1 S D01下層	瓦質土器 碗	(口)15.0 (高)4.5 (底)4.2	密	淡灰	内面 タテハケ 外面 ヨコナデ
11	W1 S D01下層	須恵器 皿	(高)7.4	密	灰白	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ 底部ヘラキリ
12	W1 S D01下層	須恵器 短頭盃	(口)7.1 (高)7.9 (底)6.0	密	灰	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ 下半ヘラケズリ
13	W1 S D01下層	土師器	(口)17.4 (羽)23.8	やや粗	淡灰黒	内面 ヨコイタナデ 外面 ヨコナデ・ナデ
14	W1 S D01下層	土師器 羽釜	(口)19.0 (羽)20.8	やや粗	淡灰黒褐	内面 ヨコナデ 体部イタナデ 外面 ヨコナデ 体部ケズリ後転タテハケ
15	W1 S D01下層	土師器 甕	(口)16.8 (高)12.6 (底)15.2	やや粗	暗茶褐	内面 ユビオサエ 下半ヘラケズリ後ナデ 外面 粗タテハケ
16	E S D30	土師器 小皿	(口)12.2 (高)2.2 (底)7.0	密	灰	内面 回転ナデ 外面 底部回転ヘラキリ
17	E S D30	土師器 小皿	(口)9.2 (高)2.1 (底)6.1	やや粗	灰黒	内面 回転ナデ 外面 底部回転ヘラキリ
18	E S D30	陶戸蓋 天目碗	(口)12.0 (高)5.7 (底)4.7	密	灰白 黒褐	外面 ケズリ
19	E S D30	土師質 小皿	(口)36.8	密	明黄褐	内面 ヨコナデ 外面 ユビオサエ・ナデ
20	E S D01下層	東播系 こね鉢	(口)39.6 (高)12.1 (底)13.0	密	灰	内面 ヨコナデ 外面 ユビオサエ・ナデ
21	E S D30	瓦質土器 羽釜	(羽)34.4	密	焦褐	内面 マツメ 外面 ヨコナデ
22	E S D30	土師質 羽釜	(口)24.2 (羽)28.4 (底)29.1	密	明黄褐	内面 ヨコハケ後ユビナデ 外面 ユビオサエ・ナデ

(口)=口径 (高)=器高 (底)=底径 (大)=体部最大径 (ツ)=ツマミ径 (羽)=羽径

第4表 出土遺物観察表



第25図 調査区割図



写真35 W区第2造構面SD 01検出状況(南より)

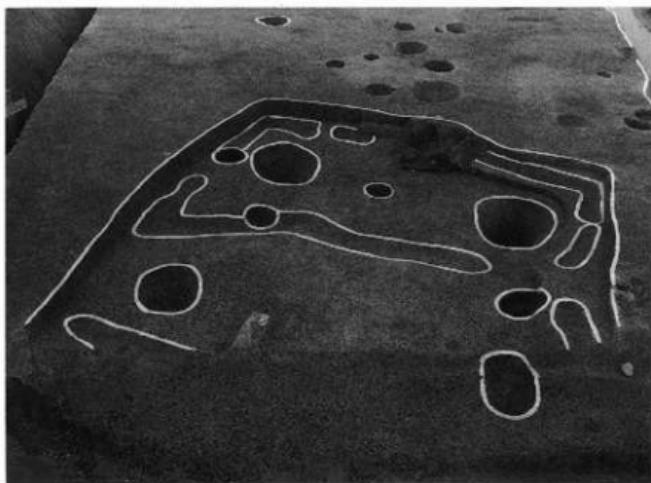


写真36 E区第2造構面竪穴住居跡全景(南より)

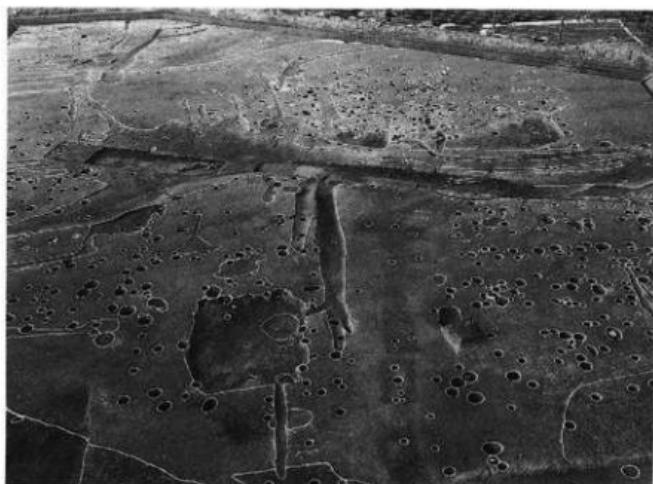


写真37 E区第1造構面全景(南より)

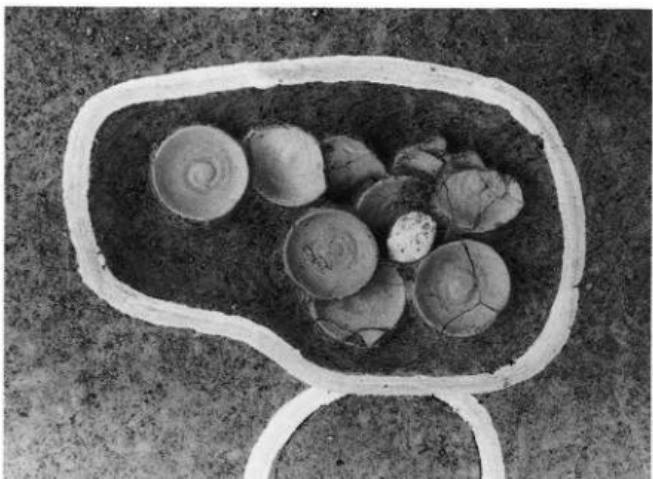


写真38 E区第1造構面土師皿出土状況(西より)

6. 川津中塚遺跡 I 区

1. はじめに

川津中塚遺跡 I 区は、香川県教育委員会が瀬戸大橋坂出インターチェンジ用地内で、昭和60~62年度にかけて実施した下川津遺跡の南の延長上に位置する。

下川津遺跡の調査は、調査面積約9万m²と大規模なもので、一集落をほぼ全面に近く調査できた点に特徴がある。この遺跡は4つの微高地部分とその間に所在する低湿地部分に分かれ、主に微高地上より
①弥生時代前期 ②弥生時代後期~古墳時代前期
③古墳時代後期~鎌倉時代 ④室町時代末の合計4

時期の集落を検出した。住居跡だけでも397棟を数え

る大規模な集落跡である。この遺跡の中塚遺跡と接する南端の地点では、7世紀前半頃に属する在地の有力首長の居館を検出した。この居館は建物5棟および延長32mを測る堀、建物の周囲を巡る雨落ち溝等から構成され、建物配置に企画性が認められる。また、やや時期が異なるが、周辺の溝から主頭太刀の柄頭・耳環・管玉・勾玉等が出土した。主頭太刀は有力首長クラスの持ち物で、この居館の居住者の階層を推定できる資料となる。なお、先の調査では、この居館の詳細な範囲については課題として残されていた。しかし、今回の川津・中塚遺跡 I 区の調査では、その南の状況を明らかにすることができた。

2. 調査概要

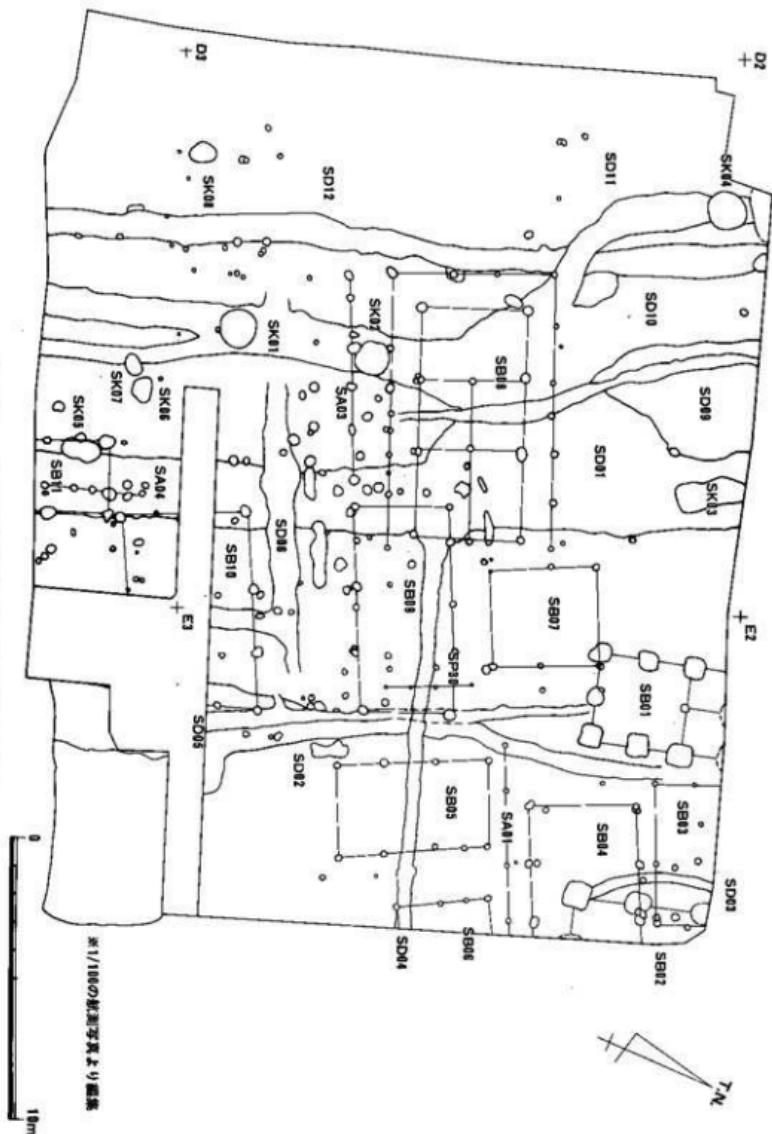
川津中塚遺跡 I 区で検出された主要造構は、弥生時代後期~古墳時代前期の溝1条、古墳時代後期後半の建物2棟・溝5条、平安時代後半~鎌倉時代の建物9棟・溝5条等である。

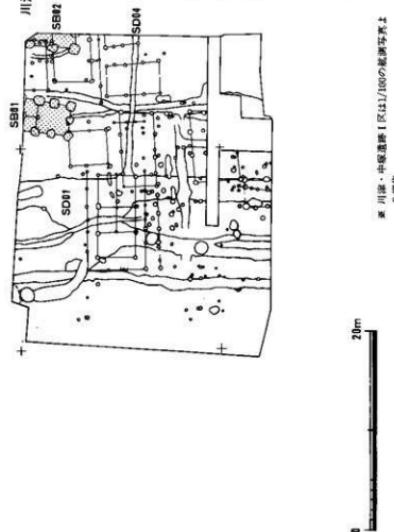
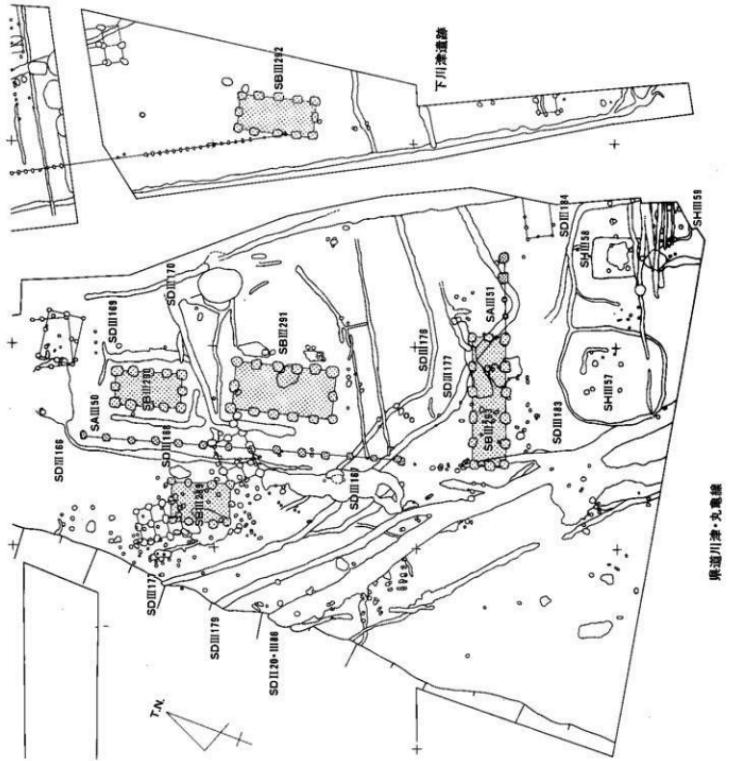
弥生時代後期~古墳時代前期の溝はSD01である。この溝は下川津遺跡SDII20・III86よりつく溝で、調査区西よりに位置し、北西方向に延びる比較的幅広な溝である。上層は6世紀後半~7世紀初頭までの遺物を含み、古墳時代後期後半に再掘削されている。なお、この溝からは耳環が1点出土した。下川津遺跡の事例を合わせると、この溝からは合計2点出土したことになる。

古墳時代後期後半の建物は、調査区の北東隅で部分的に検出されたSB01・02である。SB01は2×1間以上、SB02は3×2間で東柱を持つ。時期は7世紀の第1四半期前後に属し、2棟ともに真北より15°前後西に向く南北棟で、東西に並列に配置されている。また、この方位は、先に触れた下川津遺跡の居館の建物方位に類似する。同時期の溝は、先に触れたSD01上層及びSD02・03・04等である。SD04はSB01・02より南に約6m離れた地点を、建物の主軸方位に対して概ね直交する方位で、直線状に東西方向に延び、SD01と交わる。なお、この溝より南には



第27図 川津中塚遺跡I区A地区遺構配置図





七 雜著

WINTER 1955

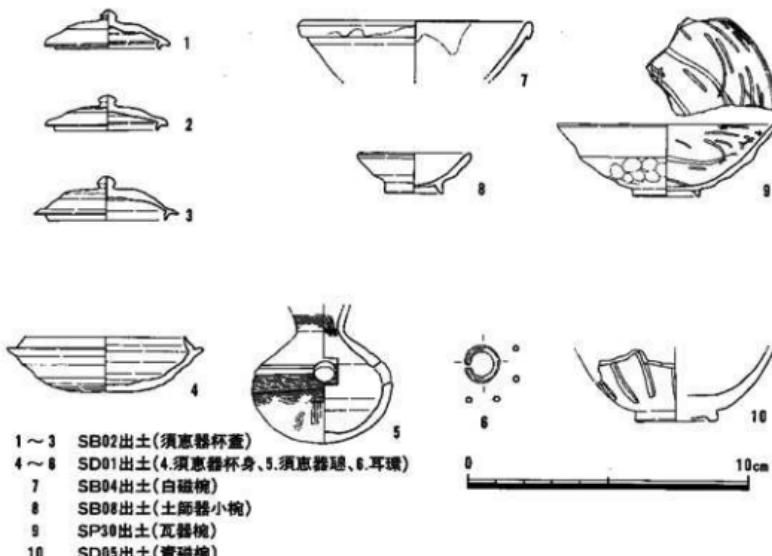
同時期の建物は見出せなかった。そのため S D 04 は、時期・配置・方位等より S B 01・02 に関連する施設と考えられる。

下川津遺跡と中塚遺跡の調査成果より推定して S B 01・02 は、時期、配置、方位的な点で、下川津遺跡の南端の居館内に含まれる可能性が高い。また、S D 04 は、この溝より南に同時期の建物が見られない点より、居館の南限を測する溝として理解したい。なお、この居館の最小範囲を推定すれば、北端は下川津遺跡の S B III 290、南端は中塚遺跡の S D 04 で南北約 85m、東端は下川津遺跡の S B III 292、西端は同じく S B III 289 で東西約 45m、面積は概ね 3,300m² 以上を占めるものと考えられる。

平安時代後半～鎌倉時代の建物は、調査面積が少ないので多数検出され、合計で 9 株確認できた。主軸は、概ね真北より 25° 前後西へ傾け、東西棟が 5 棟、南北棟が 4 棟確認できた。これらの建物の中には、3 面廊の 2 × 3 の建物 S B 08 が見出せ注目できる。なお、同時期の造構は今後周辺部を調査するに当り、主体を占めることが予測できる。

(参考文献)

香川県教育委員会等『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 VII—下川津遺跡—』1990・3



第 28 図 川津中塚遺跡 I 区出土遺物

写真 39
全景(西より)



写真 40
SB 01・02、SD 04
(南より)

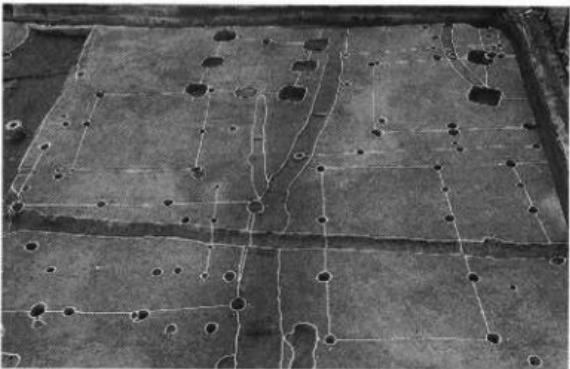


写真 41
SB 02柱痕内
遺物出土状況



7. 川津中塚遺跡II区

現大東川の東方約400mの位置に所在しており、周知の下川津遺跡の南方約100mに隣接して立地する。

また、現地表面においては、7m前後の海拔高を測る。

調査の対象とした地域は、南北方向の距離が約270mの広範囲に及んでおり、調査に着手する直前においては、全域が農地として利用されていた。しかしながら、検出した遺構の内容と旧状における地形的条件により、3地区に大別することが可能であるとの結論に至っている。すなわち、調査対象地の約1/2の面積を占有する北半部の旧中洲と考えられる微高地形の地域と、中央部の低地の地域、さらに、南端部の微高地形の東縁辺部に相当する地域である。



第38図 遺跡周辺地形図

そこで、以下においては、各地区における調査成果の概要と、報告書作成作業時に完明すべき研究課題の要点の一部を述べることにしたい。

(1) 北部地区の概要

当該地区については、弥生時代後期において、微高地形北半部の居住空間として利用が開始され、古墳時代と奈良時代に無住地と化した後に、平安時代前期に至って再び集落の形成が認められる。しかも、同時期の集落域は、既に微高地形上の全域に及ぶことが判明している。ところが、鎌倉時代を最後に、集落を構成する遺構を確認することができない。

検出した主な遺構は、弥生時代後期の竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、古墳時代後期の溝状遺構、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物跡、井戸跡、土壙墓、溝状遺構である。

(2) 中部地区の概要

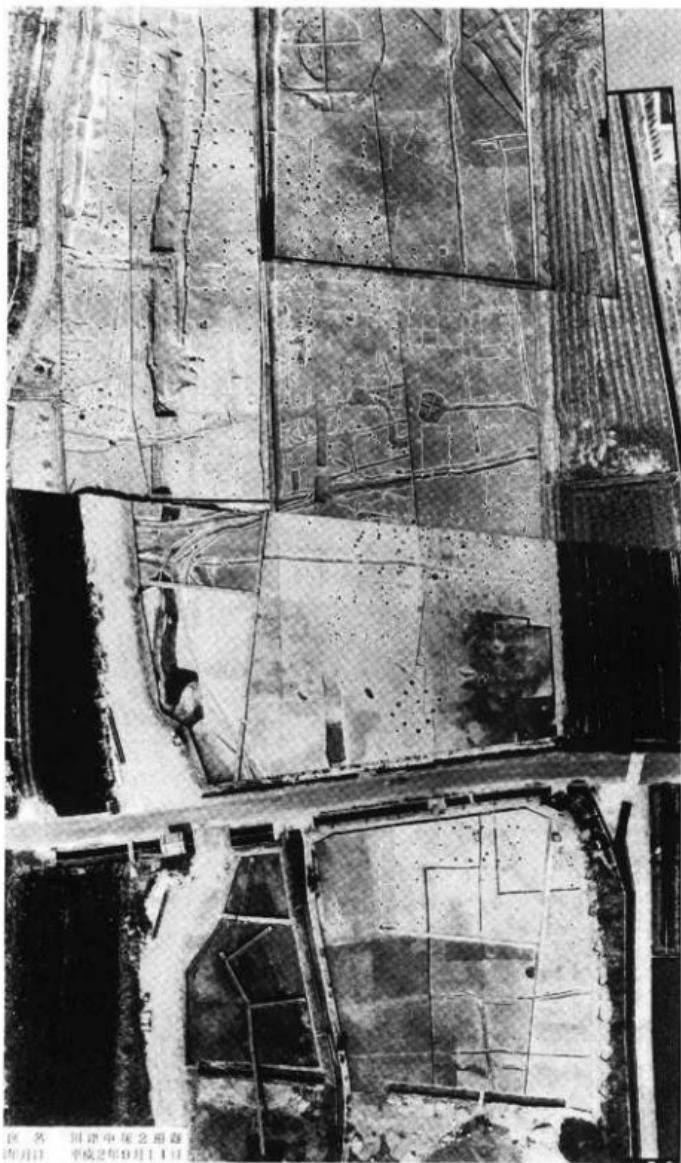
遺跡地を東西方向に横断する河川跡と、北半部の微高地形の西縁辺部を南北方向に周廻する河川跡を検出した。これらの遺構は、弥生時代前期に埋積を開始するが、その後も長期間にわたり凹地形状を呈していたがために、居住城として開発されるには至らなかったことが推測できる。

(3) 南部地区の概要

微高地形の北東斜面部に相当することから、複数の自然流路が縁辺部を北流する状態をみることができる。特筆すべきは、平安時代前期に埋没したV字形の断面形態を呈する溝状遺構である。同遺構は、本遺跡地内においては、最大規模（最大幅300cm、最深部130cm）を有することから、当該地域における基幹水路として機能していたことが考えられる。出土遺物としては、日常雑器以外に、灰陶器、綠釉陶器、曲げ物（桶の底板）、動物遺体がある。

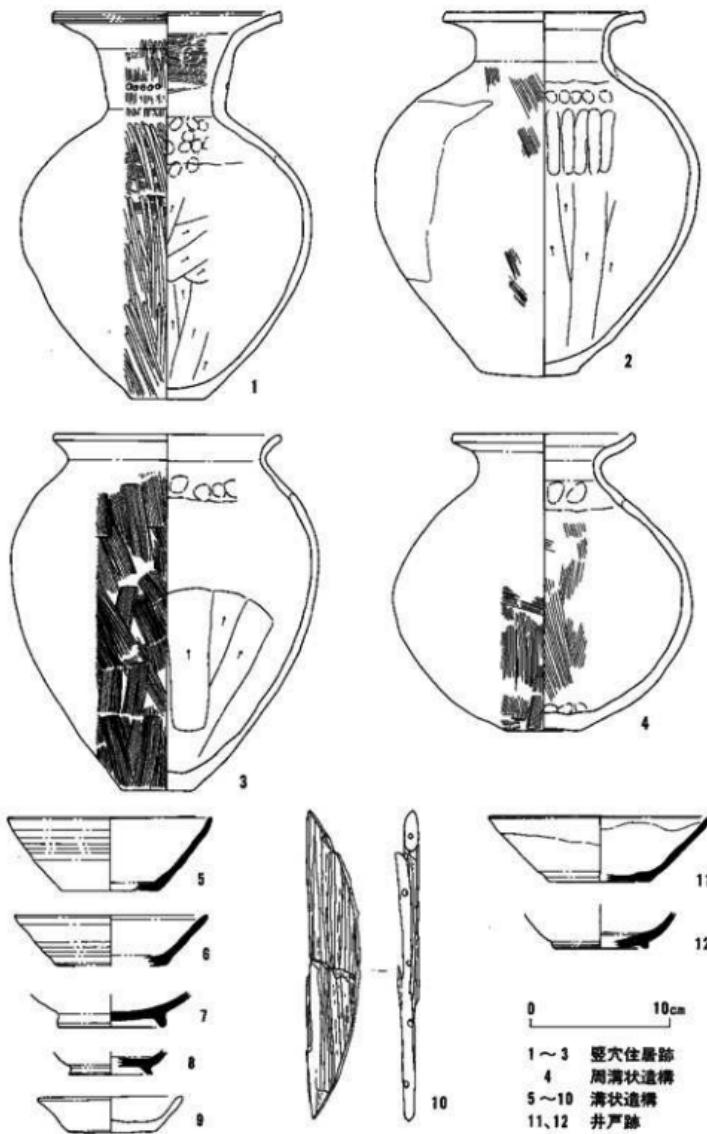
(4) 研究課題

- ① 中部地区において検出した河川跡の埋没時期が、弥生時代後期に比定できることから、本遺跡地の基本的な地形環境が当該時期に完成したことが判る。すなわち、集落域を構成する微高地と、荒れ地もしくは牛産域としての低地の分化が可能になるが、その後も堆積作用による微細な環境の変化を認めることができる。
- そこで、自然環境の変化が人間の生活に及ぼした影響と、人間の自然環境への適応の実態について、通史的に追究することが必要であろう。
- ② いわゆる班田収授法に基づき、耕地の区画を目的として開削されたことが想定できる幹線的な溝状造構が、平安時代前期（10世紀頃）に埋没している事実を知り得た。したがって、律令制度が既に有名無実化する過程にあり、国家の地方支配体制が弱体化していることを示唆すると考えられる。すなわち、荘園領主が自らの所領において、耕地面積の拡大を意図した独自の開発に着手したことにより、律令体制を瓦解させるとともに、荘園体制を充実させるに至った経緯が解明できるであろう。
- ③ 平安時代から鎌倉時代の集落跡が、小規模な「疎塊村」の形態を示している点と、名主階級の所有であることが推察される屋敷地内部において、井戸跡を検出した事実から、同集落跡の形態が現存する村落の形態に連続しないことが判る。すなわち、南北朝時代以降の村落が、「惣村」としての結合状態を示すことにより、井戸の共同利用を開始し、現存する村落の基礎的な形態を構成したことから、同集落跡はその直前の段階の形態を留めていると考えられる。
- そこで、従前の村落史においては、南北朝時代の「惣村」の出現時期に顕著な画期を求めてきたが、この点を考古学的な方法を用いることにより、裏付けることが可能であると考えている。しかも、「惣村」の出現を村落史における「中世的」な形態の萌芽であると仮定するならば、本遺跡地において確認した集落跡は、「古代的」な形態であると呼べるのではなかろうか。
- ④ 北部地区は、鎌倉時代以降、無住地化するが、北西部において、江戸時代中期に埋没した北流する溝状造構の調査を行った。同造構に共存する施設が遺存しないことから、その使途を判然とすることは難しいが、同地点は、弥生時代後期と古墳時代後期において、完全に流路方向が一致する水路として利用された経緯が判明したことにより、当該地域の土地区画上の拠点として位置付けることができるであろう。
- そこで、本遺跡を含む周辺地域の現地表面において観察することができる方格地割について、従前よりのいわゆる条里制の造構であるとの見解を再検討し、その形成時期についても積極的に考察を行う必要性が考えられる。
- ⑤ 本遺跡地は旧河津庄比定地域に隣接することから、荘園遺跡としての性格を有することが推察できる。したがって、報告書作成に当たっては、上記の課題の解決を軸として、いわゆる歴史時代における考古学の方法論の確立を最終目的とする多角的な研究を進める必要があろう。



区名：川崎中核之地区
写真日：平成2年10月11日

写真 42 造構検出状態(北部地区)



第31図 遺物実測図



写真 43 穹穴住居跡伴出遺物



写真 44 满状造構伴出遺物(1)



写真 45 溝状造構



写真 46 溝状造構伴出遺物(2)

8. 川津下樋遺跡

1. はじめに

川津下樋遺跡は、ほぼ南北に流路をとる大東川が西に蛇行する地点より北約200mに位置する。当遺跡は下川津遺跡の微高地部分が終わり、次の微高地との間の低地部に立地している。

2. 造構・遺物について

発掘調査の結果、検出された造構は溝44条、自然河川1、土坑6基、柱穴数個、水田跡などがある。また自然河川からは井堰が検出されている。

溝は調査区全体で検出されており、時期は弥生時代から中世のものである。特に弥生時代前期のものは自然河川で検出された井堰からの取水溝として機能していたもので北東方向に延びている。また現在の地割りに沿うものが検出されている。これは推定条里坪界線に沿うもので、出土遺物より12世紀には埋没したことが判る。

自然河川は調査区南半で南から北西にむかって延びている。規模は幅が約4~5mで、深さが約1m程度のものである。この自然河川はほとんど砂層によって堆積しており、この砂層より井堰が検出された。井堰は流路に対して直行する横木を、斜めに打ち込んだ杭によって固定する合掌型構造のものである。井堰の規模は、全長約4m、幅約3.6m、現存での高さ0.5mを測り、上部は壊れているが下部構造より井堰の構造が判明した。横木は直径が10~15cm、杭は直径が5~10cm程度のもので、斜めに打ち込まれた杭にはみかん削りされた杭も見られる。また井堰の上流側ではこの自然河川に流れ込む溝（排水溝）と井堰で水位を上げた水を取り入れる溝（取水溝）も確認されている。1~3・6~8は壺である。1は口縁部が短く屈曲し、肩部に段が見られるものである。3・6は肩部に多条化された沈線が見られるものである。やや古いものも含まれるがほぼ弥生時代前期新段階のものである。4は縄文時代晩期の深鉢である。5は朝鮮系無文土器の壺であろうか。9は井堰を構成する杭のなかより出土した壺の底部である。体部内外面にはヘラ磨きが密に施されている。

この井堰の北方約50mの地点で水田跡が400m²ほどの範囲で検出されている。水田跡は畦畔が2.3m~3mの小区画の水田で、区画ごとに水口が検出されている。小区画を構成する畦の幅は狭いもので0.2m、広いもので0.5mあり、これらは大畦をひとつの基準として造られているようである。また、水田面上には稈株の跡も検出されている。この水田は弥生時代中期の遺物を包含する溝によって壊されており、また耕作土より縄文時代晩期の遺物が出土していることなどから弥生時



第32図 遺跡周辺地形図

代前期のものと思われる。10は弥生時代中期の溝より出土した石槍である。11～13は水田耕作土から出土した石製品である。11はスクレイパーである。おそらく取穫具として使用したものと思われる。12・13は石匙である。

これらのことから弥生時代前期に井堰と水田跡が併存していたことが判る。

3.まとめ

当遺跡は前述したように微高地間の低地部にあたり、弥生時代前期以降中世まで住居域としては機能しておらず、生産域であったことが伺える。また、今回の調査により検出された井堰の構造（合掌型）は從来弥生時代後期に出現し、古墳時代に一般化するといわれていたが、それを弥生時代前期までさかのばらせる遺構として重要な意味を持つものである。また、坂出平野の水田開発が高度な技術により行なわれていたことが判る遺跡である。



写真47 SR01 井堰検出状況



写真48 井堰拡大



写真49 井堰断面

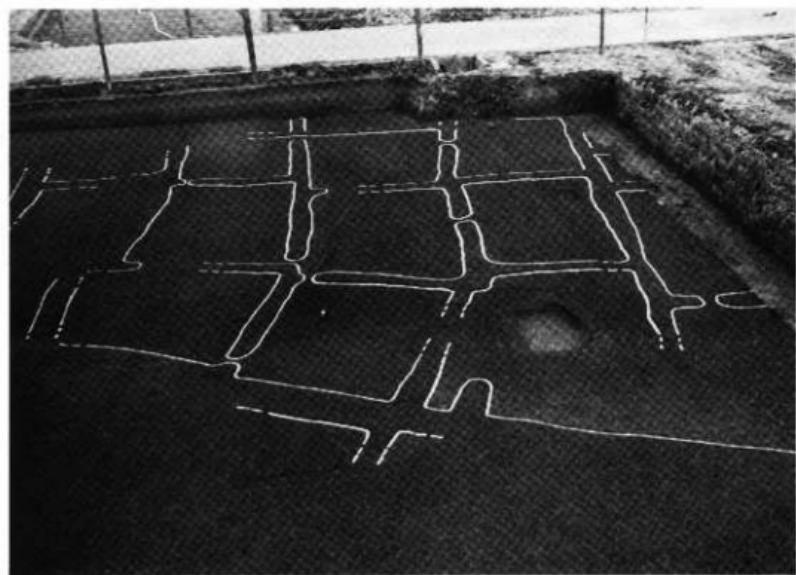
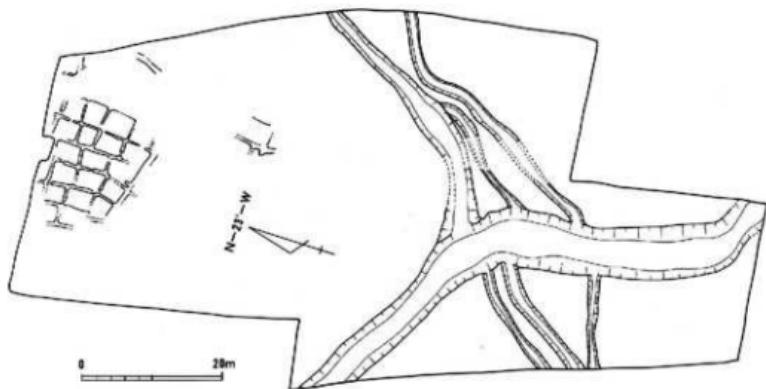
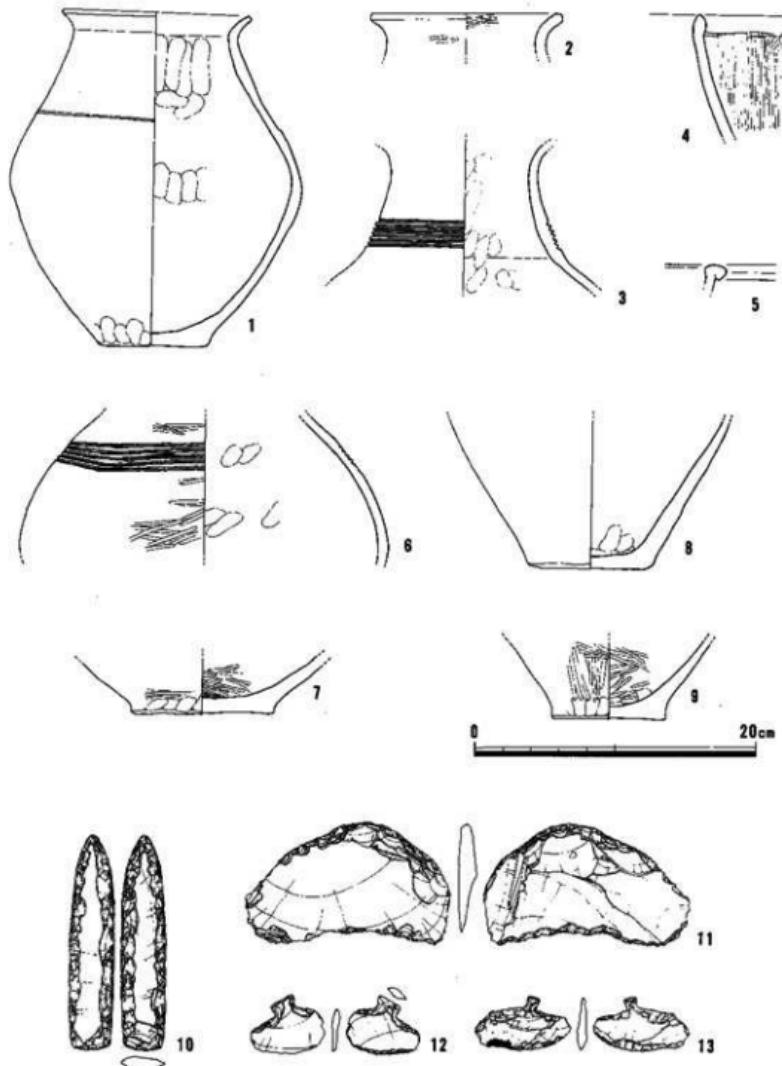


写真 50 水田畦畔検出状況



第 33 図 南半部造構配置図(弥生時代前期)



1～9 埋没河川出土(8は井埋部から出土)

10 取水溝出土(石槍)

11～13 水田耕作土出土(11削器、12・13石匙)

第34図 SR01出土遺物実測図

9. 川津二代取遺跡

川津二代取遺跡は、坂出市川津町弘光に所在する。調査区の南端は大東川に接し、北端は川津下掘遺跡までの範囲である。調査の結果以下の3時期の遺構・遺物が検出された。

弥生時代前期の自然河川

調査区域の南東から北西方向に曲流する幅約6m、深さ約1.5mの自然河川である。粗砂、小砾によって埋積されており、洪水による埋没・廃川の過程が推察される。北接する川津下掘遺跡の井堰の構築された河川につながるものと考えられ、全面調査したが少量の遺物が採集されたのみである。大半は弥生時代前期新段階に属すると思われる。

弥生時代後期終末から古墳時代前期の溝

弥生時代前期新段階の時期に埋没した河川の流れに沿うように何条もの溝が検出された。これらの溝は掘り込みが明瞭な部分と人為によるものか自然形成なのか不明瞭な部分があり、なおかつ複雑に切り合っている。埋土は巨視的には灰色砂質土（下層）・暗茶褐色粘質土（上層）にわけられ、主として下層から遺物が出土した切り合いから1、2条の溝が掘削・埋没をくりかえた結果として、多数の溝が形成されたものと考えられる。遺物は、少量ではあるが完形品が点在して検出された。どの溝も弥生時代後期終末から古墳時代前期の遺物を包含しており、細かな年代差は今後の検討課題である。

13世紀末から14世紀初めの集落

調査区の南部を中心に、多数のピット、溝、土坑が検出され、出土遺物から13世紀末から14世紀初めにかけてのものと考えられる。ピットの平面配置から18棟の掘立柱建物が復元された。このうちには、柱痕に完形の杯が埋められていた例の他、根石をもつものが多数存在した。建物の主軸の方向には概ね規則性が見いだされるが、切り合いなどから2乃至3時期に分けられると思われる。

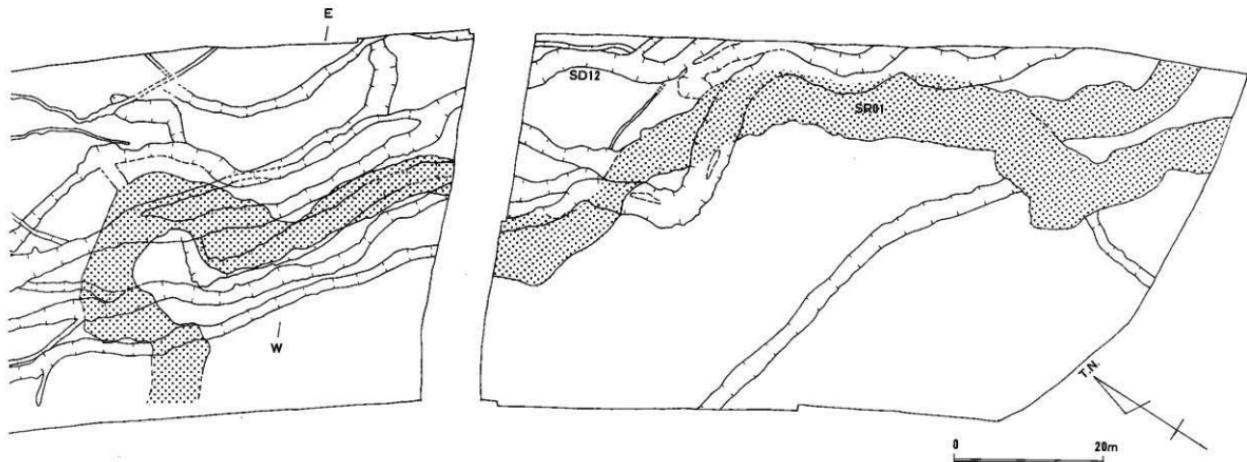
弥生時代前期新段階に埋没した自然河川に沿うように、弥生時代後期終末から古墳時代前期にかけて溝が掘削されているが、埋土からその後は低湿地となっていたと考えられる。しかし、中世になるとこの部分にも集落が営まれ、高燥な土地条件に変化したようである。同様の例は下川津遺跡でも認められ、大東川の河床低下に原因が求められると考えるが、今後の課題としたい。



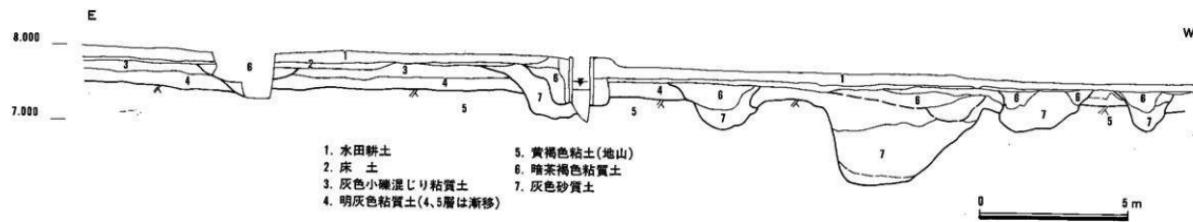
第35図 遺跡周辺地形図



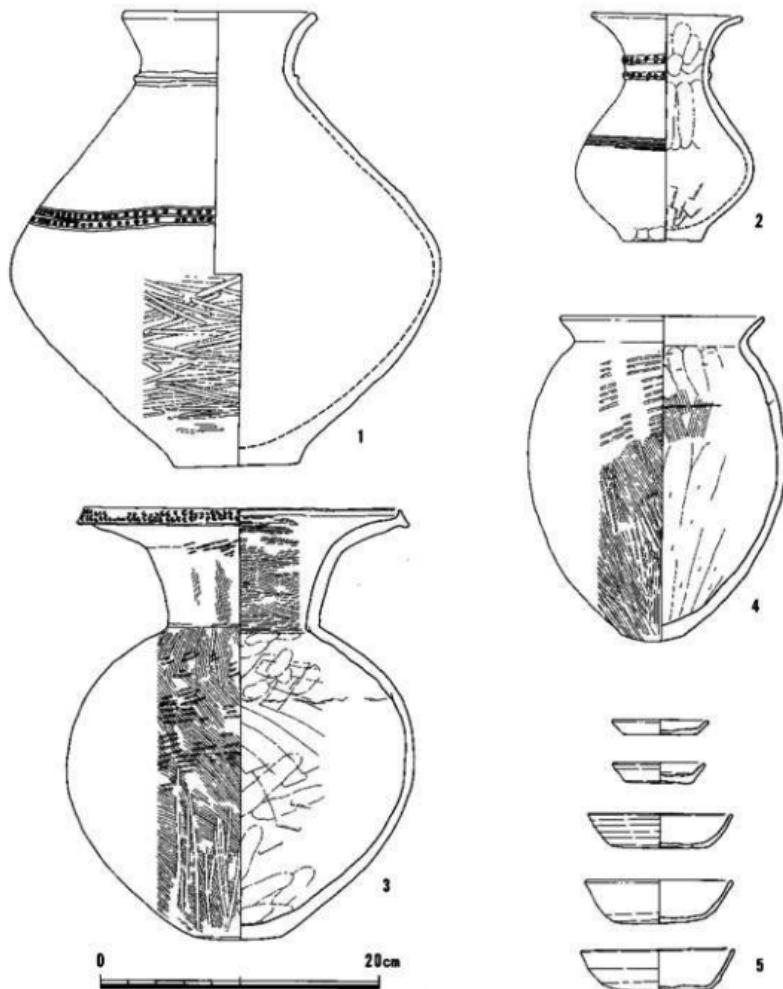
第36図 達磨配置図(中世以降)



第37図 造構配置図(古墳時代以前)



第38図 土層断面図



1、2 自然河川埋土(弥生時代前期)
 3、4 SD-12下層(弥生時代後期末～古墳時代前期)
 5 SD-01埋土(中世)

第38図 出土遺物実測図

写真 51
調査前風景(東北から)



写真 52
自然河川断面



写真 53
自然河川 遺物出土状況





写真 54
弥生後期末～古墳前期の溝群



写真 55
弥生後期末～古墳前期の溝群

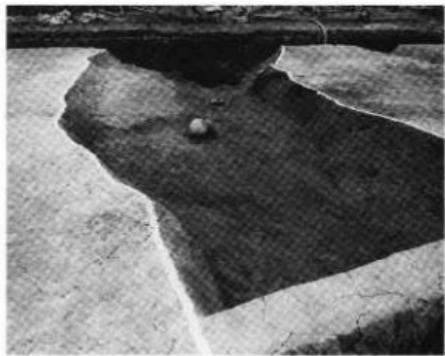


写真 56
弥生後期末～古墳前期の溝
遺物出土状況

写真 57
中世遺構発掘状況



写真 58
中世据立柱遺物跡

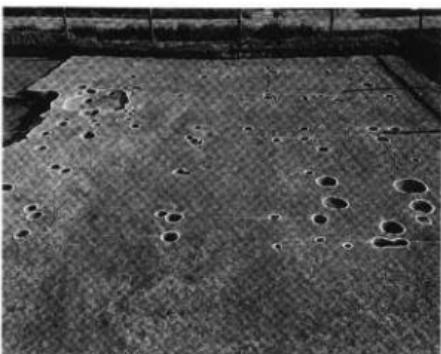


写真 59
中世溝 遺物出土状況



10. 川津一ノ又遺跡 I・II区

(1) 川津一ノ又遺跡 I 区

飯山町において南北に流れる大東川は坂出市川津町に入ると西に大きく蛇行し、北西方向に流れている。本調査地は西に大きく蛇行する大東川の南岸の沖積地に位置しており、この付近では周辺地域に広がっているいわゆる条里地割りはみられない。

本調査地は南北160m、東西50mを測る。調査は幅2 mのトレンチを調査地に並行あるいは直交する方向に11本設定して人力掘削と機械掘削を併用して行なった。各トレンチの深さは0.5m～1mを測るが、部分的に深さ3mまで機械掘削を行なって土層断面



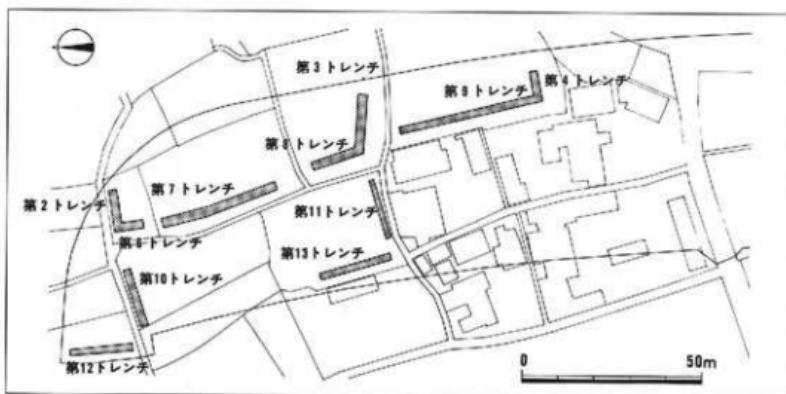
第40図 遺跡周辺地形図

の観察を行なった。調査を行なったトレンチの長さは計201mであった。

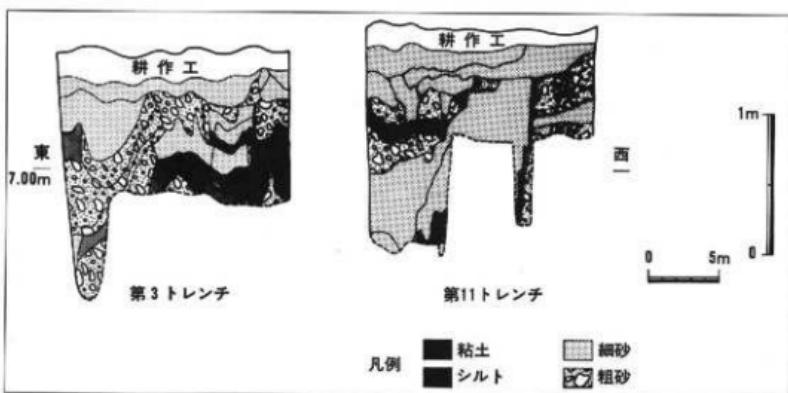
〈第2・3・4・10・11トレンチ〉 東西方向のトレンチである。いずれのトレンチも現耕作土の下にはシルト質細砂がほぼ水平に堆積しており、その下にはシルト・細砂・粗砂が西から東に緩やかに落ち込んでラミナー状に堆積していた。第3トレンチ・第10トレンチの東端では部分的に深掘りを行なった。第3トレンチでは深さ1.8mまで粗砂の堆積を確認した。第10トレンチでは深さ2.3mまで粗砂・小礫・細砂がラミナー状に堆積しており、その下にはグライ化した暗灰～暗灰青色シルト層が堆積していた。この層からは古代末～中世の黒色土器片が出土した。また、これらのトレンチからは弥生土器片・土師器片・須恵器片・瓦質土器片が少量出土した。

〈第6・7・8・9・12・13トレンチ〉 南北方向のトレンチである。前述のトレンチと同様現耕作土の下にはシルト質細砂がほぼ水平に堆積し、以下、粘土・シルト・細砂・粗砂が南から北に向って緩やかに落ち込んでラミナー状に堆積していた。第9トレンチ中央付近で深さ1.7mまで深掘りを行なったが、細砂のラミナー状の堆積を確認したのみであった。また、これらのトレンチからは弥生土器片・土師器片・須恵器片・陶磁器片が少量出土した。

本調査地は旧大東川と考えられる河川の氾濫原であることが確認された。この河川は調査トレンチの方向に対してやや斜めに南東から北西方向に流れしており、深さ2.5m以上を測る。遺物はコシテナ4箱出土したが、弥生土器片が少量出土している他は中世以降に属するものである。この河川が機能していた時期の上限は不明であるが、中世以降には機能していたものと考えられる。



第41図 トレンチ配置図(1/1,500)



第42図 第3トレンチ・第11トレンチ土層断面図(縦1/40、横1/400)

写真 60
調査地全景 調査地
は林の手前(西より)



写真 61
第7トレンチ
(南東より)



写真 62
第8トレンチ
(北東より)



(2) 川津一ノ又遺跡II区

本調査地は大東川の西岸に位置する。現地形では調査区内の南北方向の畦畔を境に、東側は西側より1.5m程低く、この畦畔のラインが旧流路のラインと考えられる。今回の調査では、大東川の旧流路の復元を始めとする旧地形の復元、及び予備調査で確認された、微高地形成前の湿地帯であったと考えられる黒色粘土層の範囲の確認を目的としたトレンチ調査を実施した。トレンチは、旧氾濫原上に大東川に直交する方向で、緩やかにカーブしながら南北方向に走る畦畔が微高地に対して張りだす位置に2本（第43図、第1・第3トレンチ）畦畔のラインが、旧氾濫原に対して張りだす位置に1本（第43図、第2トレンチ）合計東西方向に3本、前記の畦畔から微高地にかけて前記のトレンチに延長させる位置で東西方向に2本（第43図、第4・第5トレンチ）西側路線際に沿って南北方向に1本（第43図、第6トレンチ）設定した。

調査の結果、予備調査同様、西側の旧氾濫原上のトレンチでは、砂層が厚く堆積していた。旧流路の堆積は、第5トレンチでは南北方向の畦畔より西側にまで及んでいるものの微高地上ではほとんど見られず、概ね現畦畔に沿っていたと考えられる。

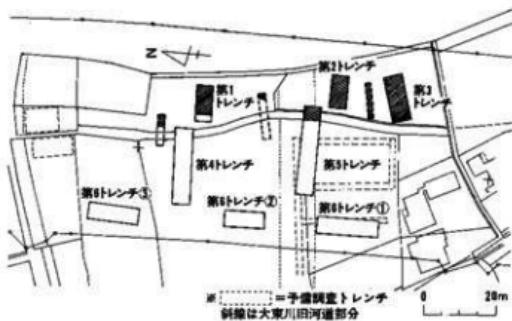
黒色粘土層は、旧氾濫原上では大東川旧流路により大幅に削られているが、微高地上では標高約6.7mから厚さ約1.5m前後にわたって堆積している。全体には水平堆積であるが、第2、第6トレンチ②で他のトレンチより40cmほど底が浅いものの、黒色粘土層の肩は検出できなかった。尚、下川津遺跡において、調査区北西部において、昭和60年度にボーリング調査を実施しているが、そこで一ノ又遺跡II区のものと類似した黒色粘土層が検出されている。本調査地とは距離も標高差もあるが、その類似性が注目される。黒色粘土層の下部は、調査区のはば全域で炭化物を多く含み、自然木も数点含んでいる。遺物は皆無であるが、今後、土壤分析やC¹⁴分析等を行うことにより、古環境の復元が期待できる。



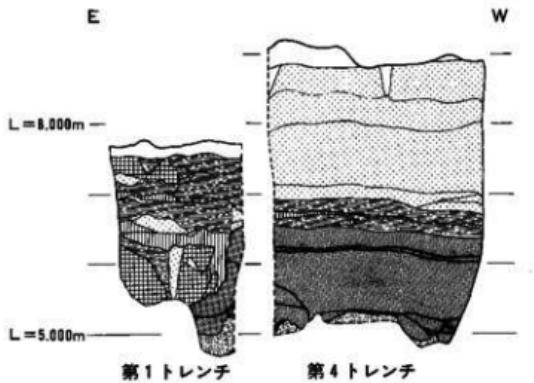
写真 63

川津一ノ又遺跡II区遠景(調査後)

当遺跡には、埋戻後、遺物収納用のプレハブが建てられた。



第43図 川津一ノ又遺跡II区トレンチ配置図



第44図 第1・第4トレンチ土層断面図

写真 64 第3トレンチ 南壁



写真 65
第6トレンチ① 東壁



写真 66
第6トレンチ 調査風景



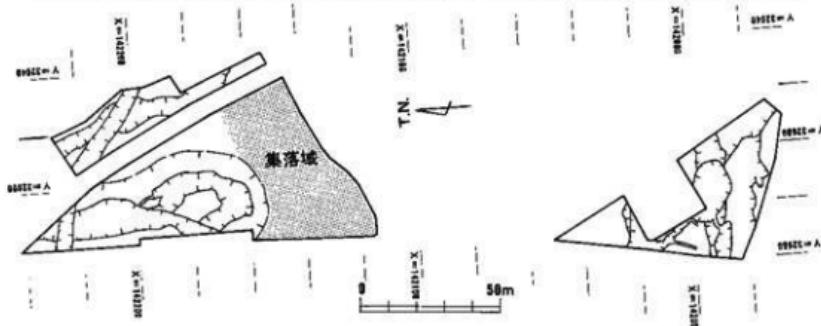
11. 川津一ノ又遺跡III区

川津一ノ又遺跡は、丸龟平野東部の飯野山北麓で、大東川西岸の平地部に立地している。調査の結果、弥生時代中期から中世にわたる集落跡（微高地部分）とその周りの自然河川跡及び水田跡等（低湿地部分）より構成される遺跡であることが判明した。微高地部分に展開する集落の変遷と、次第に埋没していく低湿地部分の開発の変遷を関連づけて考えることのできる遺跡である。遺跡はIII・IV区とその外側にも大きく広がっており、III区は集落域の北部及びその北側の低湿地部分と集落域南西側の低湿地部分に当たる。以下はIII区部分の変遷を述べる。



第45図 遺跡周辺地形図

弥生時代中期には、住居跡は検出されていない。北側と南西側の低湿地部分では埋土が砂である自然河川跡が検出されている。しかし弥生時代時代終末頃になると川跡には多量の土器を含む黒色粘土が堆積していることから、川は水が流れず湿地になっており、近辺の住居より大量の土器が捨てられたと考えられる。この時期の住居跡としては堅穴住居跡7棟と掘立柱建物跡1棟が検出されており、これらはさらに2つの小時期に分かれて存在していた。堅穴住居跡は平面形が張り出し付き円形のものが2棟、方形のものが4棟および形状不明のもの1棟である。方形のものの内3棟は方向がほぼ同じであり、いずれの住居跡も近くから延びるような溝跡が存在することからほぼ同じ時期と考えられる。掘立柱建物跡はこの溝跡のうちで幹線的役割を持つと考えられる溝跡と方向がほぼ同じであることから、溝跡および3棟の方形の堅穴住居跡と同一時期のものと考えられる。張り出し付きの円形堅穴住居跡と残り1棟の方形堅穴住居跡はこの溝跡に接さ



第46図 調査区全体図 S=1/2,000

れどおり、より古い時期のものと考えられる。またこの時期に統く古墳時代前期にも竪穴住居跡1棟が検出された。この住居跡は平面形が長方形で周りに溝をめぐらしている。

次に集落跡が検出されるのは古墳時代終末頃である。竪穴住居跡1棟と掘立柱建物跡10棟前後が検出されている。掘立柱建物跡は重複および方向の違いがあることから、さらに数時期に分れて存在していたことがわかる。この時期以前に低湿地部の川は流路を多少移動して流れたことがあるが、この時期には水が流れず再び湿地になっている。この時期以後は川跡の埋没が進み、低湿地部は水田として利用される。次の奈良時代から平安時代にかけて集落域南西側の低湿地部分では、水田畔跡と木樋を使った水口跡が検出されている。水田畔跡は2つの時期のものが検出されている。また幅4mの大畔跡も検出されており、これは飯野山の山裾と一ノ又遺跡の微高地部分の間が最も狭い場所に位置していることから、隣接集落へ続く道跡であった可能性もある。

中世には掘立柱建物跡は検出できていないものの、柱根があることから柱穴跡と考えられるピットが多数検出されており、この時期にも集落が存在していたと考えられる。また低湿地部はさらに埋没が進み、引き続き水田として利用されていたと考えられる。特に集落域北側の低湿地部では、水田畔跡および水田に水を引いていたと考えられる用水路跡が検出されている。

以上のように集落とその周辺の景観の変遷を考えられるが、墓に関しては時期不明の土塙墓1基が集落域で検出されているのみであることから、各時期の集落跡に対応する墓域は調査区外にあったものと考えられる。

最後に、一ノ又遺跡は調査の都合上、2つの調査区に分けて調査を行ったが、集落跡の大部分はIV区内で検出されている。今後はIII・IV区を合わせて検討することにより、飯野山北麓における古代から中世にかけての開発の変遷の一部が解明できるものと考えられる。



写真 67 集落域西半全景(北より)